

我
自
刊
我

嘉永明治年間錄

卷十

| | | | | |
|--------|--------|-------------|-------------|-------------|
| | | | 五 二 七 | 和 書 門 |
| 二 〇 | 二 〇 | 五 二 二 | 二 二 | |
| 冊 | 架 | 函 | 號 | 類 |

| | | | |
|------------------|-------------|-----------------------|-------------|
| 庫 文 閣 內 | | | |
| 一 五 〇 函 | 二 〇 冊 | 五 二 七 二 號 | 和 書 類 |

| | |
|---------|-----------|
| 內 閣 文 庫 | |
| 番 號 | 和 5272 |
| 冊 數 | 20 (11) |
| 函 號 | 150 169 |



嘉永明治年間録卷之十

目次

文久元年 辛酉

- 一 新ニ外國御用出役ヲ置ク
- 一 江戸市中ニ命レテ其町名ヲ木綿幟ニ記シ町毎ニ建テシム
- 一 旗下津田英次郎封内下總佐原村浪士暴動ノ旨届書
- 一 和宮縁組慶賀ノ使京都ヨリ歸府
- 一 犯法者捕縛ノ儀兼テ隣境ニ約シ置クヘキノ達
- 一 清人訓導英裁清國ノ兵亂ヲ談話ス
- 一 浪士白石平八郎水戸街道稻吉宿ニ於テ斬ラル
- 一 浪士亂妨ニ就テ麻生新庄駿河守關東取締出役ヲ該地ニ下ス
ヲ請フ
- 一 大坂城代松平伯耆守發途ニ就テ朱印ヲ賜フ
- 一 桑ノ枝皮ヲ以テ綿ヲ製スルニ就キ達書
- 一 將軍家實母實成院ヲ紀州ヨリ江戸城ニ移ス



嘉永明治年間録卷之十 辛酉 一

浪人亂妨ノ旨代官佐々木道太郎ヨリ届書
 將軍家茂公亞國ミニストルヲ柳營ニ見ル
 二月二十八日万延元年ヲ改メテ文久元年ト爲ス
 水府浪士自訴歎願書
 鍋島侯世子淳一郎柳營ニ加冠ス
 異風頭巾ヲ以テ覆面スルヲ禁ス
 嚴ニ密姪賣ノ類ヲ禁ス
 松平阿波守正四位ニ叙ス
 外國事務勤勞ヲ稱シテ一万石村替ヲ安藤對馬守ニ命ス
 將軍家移徙慶賀ノタメ能樂ヲ柳營ニ行フ
 輕罪者ヲ免シテ蝦夷地ニ送ル
 文武勉勵ヲ諸士ニ諭ス
 儉素ノ季猶五年ヲ増スノ命令
 御料租税金半年ノ用途ニ足ラサルヲ以テ諸事益省畧スヘキ
 ノ旨ヲ三奉行等ニ達ス

塩谷甲藏若山壯吉博學ニ就テ御目見ヲ命セラル
 方今時世一變ノ時ニ因テ旗鎗弓砲隊長ヲ老輩ニ任スヘカラ
 サルノ旨命令
 諸藩士諸役人引籠月數並死去届等ノ遅延ヲ禁ス
 布衣以上諸役人老衰者免役セスシテ隱居スルヲ許ス
 魯人船ヲ對州尾崎浦ニ繫クニ就テ宗對馬守ヨリ再届書
 魯人對州海滯泊ニ就テ同地鎮撫ヲ小栗豊後守等ニ命ス
 魯人滯船ニ就テ宗對馬守ヨリ注進三度ニ及フ
 同事ニ就テ宗對馬守ヨリ注進四度ニ及フ並老臣建白書
 同事ニ就テ宗對馬守ヨリ注進五度ニ及フ
 對州侯攘夷決議ノ旨ヲ一藩ニ布告ス
 魯人滯船ニ就テ對州ヨリ注進六度ニ及フ
 魯人滯船ノ趣注進ニ就テ台命ヲ對州ニ下ス
 和宮關東ニ下ルニ就テ勘定奉行小笠原長門守京都ニ使ス
 彗星乾方ニ出ツ天文方建白書

嘉明年間録卷十
 辛酉
 二
 戦
 戦
 戦

浪士兵器ヲ携ヘテ英人旅館品川東禪寺ニ亂入ニ付警衛諸隊ヨリ届書

浪士英人旅館東禪寺ニ亂入ノ巷説

武州下目黒村陸田中捨物アルニ依テ訴書

東禪寺ニ於テ捕フル浪士柳鉞三郎ヲ生駒徳太郎邸ニ幽ス

英人旅館警衛郡山西尾兩侯褒詞ヲ蒙ル

對州鎮撫使小栗豐後守等ノ書簡江戸ニ到着ス

六月朔日蝕

東禪寺亂入ノ殘黨石川金四郎ヲ山名主永助邸ニ幽ス

武家屋敷替年限十年ヲ五年ニ換フ

東禪寺亂入ノ殘黨ヲ穿鑿スルノ命

百姓町人ニ大船所持ヲ許ス

異風ノ筒袖冠物ヲ禁ス

仙臺侯參府延期ヲ再願ス

對州人民不平ニ依テ鎮撫使小栗豐後守等遁歸ノ巷説

小栗豐後守溝口八十五郎函館御用ヲ命セラル並免役

日本海測量ヲ英人ニ許ス

英船勢州海ニ入ルヘカラサル旨藤堂侯ヨリ上書

外國ニニストル館ヲ品川御殿山ニ建築ス

諸役人訓練往復乗切登城ヲ許ス

再ヒ對州鎮撫使ヲ野々山丹後守ニ命ス

東禪寺事件勤勞ヲ謝シテ英人物ヲ贈ルニ依テ郡山藩伺書

和宮江戸着輿ノ次第ヲ諸司代ニ達ス

鍋島侯百五十封度ノ筒三挺ヲ幕府ニ上ル

尾州侯閣老安藤對馬守ノ濃州村替ヲ拒ム

櫻田事件吟味掛役人ニ物ヲ賜フ

東禪寺事件英人警衛ノ諸隊ニ物ヲ賜フ

江戸城二ノ曲輪内外ニ於テ操練ノ爲メ空砲ヲ發スルヲ許ス

和宮京都發輿日限並通輿ノ路前後三日間人民ノ往來ヲ停ム

御譜代取締ヲ小笠原信濃守ニ命ス

嘉慶年開鏡卷十一 辛酉 三

- 一 隱賣女九十七人入獄巷説
- 一 和宮江戸城ニ着輿ノ道筋
- 一 内海臺場二所守衛ヲ松平越前守ニ神奈川邊警衛ヲ酒井雅樂頭ニ命ス
- 一 種痘所ヲ改メテ西洋道學所ト唱フ
- 一 竹内下野守等ニ佛英其他諸國ノ使ヲ命ス
- 一 將軍家茂公亞國ミニストルヲ柳營ニ見ル
- 一 物ヲ伊豆島小笠原島等ニ使スル者ニ賜フ
- 一 内海臺場守衛ヲ命スルニ就テ金ヲ松平越前守ニ賜フ
- 一 和宮江戸清水屋形ニ着ス
- 一 從四位中將兼肥前守松平齊政致仕
- 一 勅使御對顔京都ノ進物ヲ柳營ニ披ク
- 一 將軍家系圖清書ニ就テ林大學頭等ニ物ヲ賜フ
- 一 勅使款待ノメメ能樂ヲ柳營ニ行フ
- 一 勅シテ英人ノ伊勢志摩兩國近海ノ測量ヲ禁ス

- 一 諸品分外ノ高價ニ依テ諸商人ニ達
- 一 和宮本丸ニ入輿並慶賀ニ就テ物ヲ供奉ノ公卿ニ賜フ
- 一 將軍家婚姻慶賀ノ勅答ヲ上ル並白銀卷物等ヲ勅使及ヒ公卿衆ニ賜フ
- 一 和宮入輿ノ賀ニ就テ物ヲ諸役人ニ賜フ
- 一 諸侯叙任並賜金拜借金各差アリ
- 一 長州侯開鎖論ヲ建白ス

万延二酉年正月十九日 村松町 名主 孫六
麻布谷町 名主 太一郎

廿二日 旗下津田英次郎封内佐原村浪士暴動ノ旨届書

私知行所下總國香取郡佐原村百姓農間渡世旅籠屋久左衛門方へ當正月十七日夕
商人休の者三人浪士休の者七人罷越一泊致し度由申付相斷ひ得共不得止事無
據宿を致し處翌十八日相成り當村ふ用向有之の間致逗留由申聞夫より同村名
主善右衛門方へ罷越し處同人留守中ふ付猶又年番名主仁兵衛方へ参りし處同人
儀も留守中留守居いたし居し村役人へ申聞ひに拙者儀ハ水戸浪人川又左右一
郎と申者にて久左衛門方へ旅宿致し居し處無據儀有之折入て頼度其趣意ハ當時
日本國へ夷人徘徊致し神武天皇以來無之儀心外ハ存打果度ひ得共其内の經營差
支ひ間當村身元宜敷者共より金子借用致度旨申付村役人共集會の上兎も角穩
便ハ濟せ度心組にて右浪士共へ酒肴相贈り置き組頭共兩人罷越此節年番名主共
も出府中ハ付當月下旬迄に歸國致し間夫迄日延致し吳し様申入し處左ハハ
残り居し村役人共にて取計可申當村仁兵衛由右衛門由兵衛庄次郎四郎兵衛新左
衛門長作七人の者より金千兩借用申度若し其方共より談事不行届ハハ直談可

致旨申張右ハ不容易儀ハ付種々相斷ひ得共何分承知不仕此上強て相斷ひ得ハ如
何様不法可致休にも見受し旨村役人共より届申出の間得と相糺し處相違も無
座の間前文の通不容易申立し者共の儀故早速取押へ其筋へ差出可申處多人數の
事故如何様の亂妨致し哉も難計其節ハ至り手限にて捕押し儀行届申間敷哉心痛
仕の間何卒以御威光召捕相成し様奉願度此段奉伺ハ以上

寄合 津田英次郎

附ケ札 召捕の役人早々差遣可申の間取辻さき様可成丈け穩ハ取扱致し可被
置し事

○同廿四日再届 私知行所下總國香取郡佐原村へ浪人立入の儀ハ付一昨廿二日
奉伺し處御附札を以て被仰渡然る處昨夜村役人共より左之通届申出ハ去正月十
九日ハ至り追々浪人共等嚴敷懸台有之無心の金子出來不申内ハ佐原村を引取不
申此儀ハ玉造ハ居し頭立し者より拙者共請合参りし儀にて當所の土ハ相成し迄
も引取不申殊ハ當地罷越し後ハ玉造潮來村ハ詰合し者より數度の催促萬一此方
共にて行届不申ハハ潮來村詰合の者二十三人も差越殊ハ寄しハハ津田殿へ懸
合ハても是非々々借受し趣申付組頭庄左衛門其外旅籠屋久左衛門並權之丞三



人にて金子減少等懸合ひ處言葉の内氣入不申儀有之節ハ鉄扇を以て打懸り既
 お權之丞ハ手を打れハ滞留中も往來致しハ旅人村内の者お至る迄冠り物高足お
 て側近く行違ひ者ハ鉄扇にて打擲致し往來大音お制し聲を懸け歩行致し居ハ廿
 日朝四時頃名主善左衛門方ハ七人罷越同人歸宅おハハ首を討取ハ心得にて罷
 越ハ旨留守居の者一人居合未た歸宅無之趣申斷ハ處左ハハハ悴の首を可取左も
 無之ハハハ女を人質お可召捕趣にて留守居の者を實問ハ得共全ク行方不相知旨
 斷申ハ處鉄扇を以て散々打擲致し其上同人宅戸障子襖ハ勿論家財道具迄刀を抜
 き切破り夫より往來にて瓦職仁右衛門と申者を捕へ同人を爲案内非常御用相勤
 ハ助左衛門同人召仕藤七兩人宅へ前同様の亂妨致し夫より金子用立不申ハ者庄
 左衛門外六人宅へも押込可申趣にて刀を抜き高聲お申おと右七人の者恐怖致
 し命にハ難替ハ間無余儀金子八百兩用立可申旨及挨拶廿日の夜お入右金子相渡
 し申ハ處浪人共より借用一札差出し申ハ間請取置ハ得共當節ハ係用狀繼立にて
 ハ途中にて商人体杯お身を替居ハ者村方お致徘徊居て奪取様子お付書付類ハ持
 歩行ハ儀相成兼ハ間持參不仕ハ廿一日朝四時頃年番所へ罷越申ハハハ是より潮
 來へ罷越ハハ付船一艘用意可致旨被申ハ付無據船仕立ハ處帶刀の者七人外四人

共旅籠屋久左衛門方不^不其節酒一樽鴨二羽世話相成ハ趣にて差置尤も
 未風俗を替ハ者村方お徘徊致し居ハ趣申越ハ間此段係届申上ハ以上

津田 英次郎

廿三日 和宮御縁組慶賀ノ使京都ヨリ歸府

高家横瀬山城守御目見和宮様御縁組被仰出ハ付京都へ御祝儀物被進ハ御使所
 司代酒井若狹守へ差添相勤ハ段申上之畢て田安殿御三家方御對顔京都への御祝
 儀御使相濟ハ御祝も申上右同斷ハ付惣出仕老中お調す御酒御吸物等下され諸家
 獻上物等有之

廿九日 犯法者捕縛ノ儀兼テ隣境ニ約シ置クヘキノ達

此頃近在所々浪人又ハ無宿体の者共徘徊致し無心ケ間敷事共申懸及不法ハ者も
 有之哉お相聞不届の事おハ向後右体の者共立廻ハハハ聊無用捨捕押置早々可被
 申聞ハ尤も手お余リハ儀も有之ハハハ打捨ハ共不苦ハ時宜お寄り鉄砲等相用ハ
 ハハハ不苦ハ間隣領の面々へも中合置其次第お寄てハ相互お加勢差出ハ様可被
 致ハハハ小身の面々知行所の儀ハ捕押方等不行届の儀も可有之ハ間最寄万石以上
 諸家陣屋等へ注進致し右注進次第面々居城陣屋等より召捕人數差出前同様取計

嘉慶年譜卷卅 辛酉 七

の様兼て手筈可被申付ひ○御料所並寺社領手當方の儀ハ最寄領主の面々心附ひ様可被致ひ

右之趣關八州御料私領寺社領共不洩様早々可被相觸ひ事

清人訓導美裁清國ノ兵亂ヲ談話ス

目次

於清國獄中魯英等之官吏餓死之事

廿 蒙古大臣滕王加勢于清國魯亞英敗軍之事

魯亞英追々來寇不得止事清國乞和事

從清國出戰費償金八百萬兩於年賦事

不可致踈畧洋教學者事

外國人圍朝鮮皇曆使於道曆使說得通行之事

廿三 天津守將一騎入敵陣歎願之事

外國人感守將之赤心不害天津民事

訓導美裁内話書ヲロシヤアメリカキリス外ハ一ヶ國都て四ヶ國の夷人共追々清國へ罷越通交の儀申向北京終ハ承諾頭分二十七人北京城へ入ひ儀相免ヒ一人

ツ、門内へ入ひ様爲仕入來ひ得ハ段々捕へ悉く入牢右廿七人の者共牢中にて餓死其事彼方悟り軍艦數多入寇殊の外縦横ハ及ひを蒙古大臣滕王清帝の外戚祖父ハ當る大軍と卒シ清兵と力を合セ一先打拂ヒ夷賊敗軍ハ及ハ共其後にハ引續追々來寇不得止事和交罷成然る處右夷人共難題を申立ハ廣東浙西の地にて取合ハ付失ハ銀何程差出ハ様申向其銀北京より相與へハ處又申向ハ此程清國の仕方ハより有間敷戰爭ハ相成此戰ハ費ハ銀八百萬兩ハ及ビハ故是と相辨ハ様申向押詰二百萬兩を相與へ残り六百萬兩ハ六ヶ年ハ賦り百萬兩宛年賦の約束を相立其外洋教を學ビハ者を踈畧ハ不致様申向ハ趣既ハ此節朝鮮國より皇曆使差越ハ處遼東の道中にて劔を帶ヒ者鉄砲を持ち夷人共多人數取卷使節所持の荷物を差出ハ様申聞ハ故使者我等ハ朝鮮より清國へ入貢の者にて所持の品此所にて差出ハハ使事難相立此地ハ相果ハより外無之此事情を何卒聞分け道を開ハ様申向ハ所夷人納得道を開ハ由戎とハ乍申義理の聞分有之者と相聞既ハ北京へ來寇天津の地を屠ハ節其所を守ハ將軍一騎にて彼ヶ陣ハ入ハ處夷人等早速捕へ如何なレハ一人浸ハ此陣ハ入ハ哉と責問ハ處其將答ハ我こそ此處の守ハ少少頼ミ度次第有之一人參リたる事ハ我を虜と致シハ共又ハ殺シハ共只命の儘

ふ任せ可申茲の頼度存ひの此土の民の罪無之故何卒残害を免さしめよと申向ひ
處夷人等感心致し是慈仁必害する事なりれと一軍を示し其將を許し天津の民を
不害の勿論犬一疋をも不傷其所を通り由申聞ひ事北京南京共の夷人勝手よ遊
歩多數入込ひよしにて只今の姿にて清國の祚運危き事且夕あり後明も今以
て清と取合此方にて同様夷人共勝手よ遊歩致しよし

浪士白石平八郎水戸街道稻吉宿ニ於テ斬ラル
私領分常州新治郡稻吉宿へ水戸太田在大中村の郷士白石平八郎白石藏之進と申
者兩人正月廿三日止宿致し同夜水戸殿目付の内七人小者三人同驛ふ止宿致し處
右郷士兩人止宿の趣及承召捕可申由にて翌廿四日朝間屋役人共の案内致させ様
子見届ひ處女二人相手にて酒飲罷在ひ間一同踏込召捕ひ趣聲を懸ひ節平八郎藏
之進刀を抜き手向ひの間捕方の者平八郎へ深手負せ即死藏之進儀の深手負庭へ
飛下り打倒同日夕刻息絶申ひ捕手の方に四人手疵請ひ趣宿役人届出ひ付直
ふ陣屋より家來罷出相改ひ處相違無座の間醫師呼寄手疵療治致させ翌廿五日
朝水戸殿家來夫々取計有之死人並女二人召捕一同出立致し趣在所役人共より
申越ひ右の往還筋の儀は付此段は届申上置ひ以上

○二月 浪士亂妨ニ就テ麻生新庄駿河守ヨリ關東取締出役ヲ下スナ
請フ

新庄駿河守領分の儀の水戸様係領分は相交り居ひ處舊臘以來は同所様は家來浪
人共の由其外無宿休の者共相加り多人數徒黨仕り所々へ押懸等申懸け及亂妨の
儀は付取計方の儀去暮御老中様へ奉伺ひ處當春御書取を以て被仰渡ひ内臨機の
處置如何様嚴重の取計は共不苦筋よへ共玉込鉄砲等相用ひ儀は不容易筋は付
十時宜次第の儀と相心得ひ様可仕旨被仰渡ひ猶又此程浪人共の儀は付仰出され
趣も係座は付て右係觸達の通り相心得可申處右係觸面の内隣領の面々へも
申合置其次第は寄て相互に加勢差出ひ様可致旨被仰出ひ處隣領の儀は水戸様
係領分又の診料所又の小身の診旗本様方にて申合ひ不行届ひ家人少の儀は付何
共安心不仕心配仕ひ既去月廿八日陣屋下宿屋藤屋省三郎と申者方へ多人數よ
て相越ひ處何れも恐怖仕り家内の者共不殘迹去ひ跡へ土足にて踏込打毀し亂妨
狼藉相働き居合ひ者拔身にて打擲及び夫より各主仁右衛門と申者へ罷越ひ處



入口木戸閉有之ハを打破り踏込亂妨相働シ家財諸道具打毀シ手込仕り其外宿屋へ相越シ酒食等差出させ其内頭取にても座ハ哉自分の千葉榮太郎と申者也と相名乘是より水戸領玉造村館へ引取旨申立去由毎日多人數通行仕り此上如何様の儀仕出ハも難計勿論右沙汰の通相心得嚴重ハ手當ハ申付置ハ共係料所並小身知行所の相交居ハ付てハ兼て關東御取締方出役被仰付被下ハ様仕度旨在所役場より申越ハ此段係届旁申上ハ以上
十五日 大坂城代松平伯耆守發途ニ付キ墨印ヲ賜フ
大坂御城代松平伯耆守宗秀大坂へ御暇ハ付御手づくら御墨印下され時服二十御刀御馬被下之
桑ノ枝皮ヲ以テ綿ヲ製スルニ依テ達
武藏相模上野國村々養蠶の場所にて桑の葉摘取り枝ハ燒物と致ハ由の處今度江戸赤坂表傳馬町一丁目市兵衛と申者右枝皮を以て綿を製シハ工風致シ村々へ罷越枝皮を買集ハ管ハ付以來ハ桑枝其儘燒物ハ不致農間ニ枝皮をハき取置又其儘ハめてハ相對次第相當の價を以て右市兵衛代の者へ賣渡ハ様可致ハ尤も買集方の儀ハ付我察ケ間敷儀ハ有之ハハ早々其筋へ可訴出ハ右之趣武藏相模上野國村

村へ係料私領寺社領共不洩様可被相觸ハ

十八日 將軍家茂公實母實成院ヲ紀州ヨリ江戸城ニ移ス
廿二日 浪人亂妨ノ旨代官佐々木道太郎ヨリ届書

追々御届申上ハ水戸殿家來浪人の由にて黨と結立廻リハ者の儀此節上總國佐原津の宮村ハ立去ハ共常州水戸領行方村へ止宿罷在ハ追々人數相増右黨の内重立ハ者の居所文武館と唱ハ所ハ無二無三日本鏡と認ハ旗一本進退盡忠と認ハ横幟一本押立日々調練等致シハ趣ハ有之且去る十一日水戸殿家來の由にて同國新里村役人方ハ兩三人罷越當所身元可也の者共ハ軍用金五百兩申付ハ間早々取集め文武館へ持參可申旨申付置立歸リハ付一同恐怖致シ金子調達同所へ差出ハ由且又内田主殿頭先代の砌水戸殿家來より金子八百兩借用致シ追々返濟殘金四百兩有之ハ所此節主殿頭領分下總國小見川村同人陣屋へ浪人共より度々催促ハ及ハ間領分村々へ調達申付返濟致シ趣其外右陣屋元町人共ハ金子押借申懸ハ不取揃ハ連同所猿田屋茂八後家名前不知其餘の者共ハ人質として前書行方村へ



連行の間不得止事金子三百八十兩余調達致し同村浪人住居へ申遣し金子爲請取
 罷越ひハ召捕手筈にて一同申合せ鉄砲等用意待受居の折柄浪人共十五六人金
 子爲受取罷越ひへ共只々恐怖耳致し先達ひ者一人も無之空敷金子相渡し爲引取
 ひ猶同日同國多古村又左衛門飯櫃村榮治方への兩掛一荷持せ帶刀の者兩人罷越
 是又金子押借致ひ由其外途中往來の者共浪人へ行逢ひへハ不法の堀溝へ被投込
 又ハ鉄扇杯を以て打擲ふ及び且帶刀致ひ者刀劔を被奪取ひ故右利根川筋の往
 來相止ひ由其上當三月ふ至り武州横濱へ押出ひ節ハ水戸往還並木嵐成田筋ハ差
 支有之ひハ付乗船にて下總國小見川村笹川村銚子港邊の河岸へ上陸夫より同國
 八日市場横芝通り又九十九里より房州海岸へ罷出猶乗船致し由浪人共申唱ひ
 旨風聞有之ひ段私支配村役人共より猶注進申出ひハ付此段係届申上ひ以上
 御代官 佐々 木道太郎
 廿三日 將軍家茂公亞國ミニストルヲ柳營ニ見ル
 廿八日 万延二年ヲ改メテ文久元年ト爲ス
 御三家方始出仕の面々へ於席々年號改元老中演達 右ハ付病氣幼少にて出仕無
 之方石以上の老中宅へ使者可被差出ひ

水府浪士自訴歎願書

私共去春以來南郷へ出張罷在ひ處追々申上ひ通國家の御爲身命を抛ち深く存詰
 ひ筋有之度々御下知相悖り恐入奉存ひ何分素願難默止今日迄押張り罷在ひ事ハ
 係座の處此程烈公様御事業係繼立の儀夫々ハ施行も可被爲在第一 勅諭御遵奉
 遊ばされ尊王攘夷のハ大任係擔當の儀共申迄も無之眼前御國內正邪の辨相立耽
 と御國是も御定お相成ひ係都合の由風と傳承仕ひ左の上ハ一刻も猶豫可罷在儀
 お無係座の間迅速同所引拂歸宅可仕筋お得共永々多人數出張仕居ひ内ハ少
 年血氣の進退自然無禮の所爲も不少且ハ士民一同罷在ひ事故民間一時の血氣ハ
 任せ身分不相應の振廻も有之旁御國憲お相觸不相濟儀共今更深く恐人奉存ひ依
 之此度夫々取締向相計末々の者共迄何れも村々へ相返し我々共儀も一先近在へ
 相纏り御下知奉待ひ事ハ係座の右訴の次第此上係探索相蒙り共元より可申様
 無係座へ共此節外夷の情實不容易必定不遠異變お及び 御國体お於て無余儀
 御退穰被遊べき御時節ハ至りハ儀と愚慮仕ひ間何卒年來の志願一時ハ貫き身命
 を抛て御國恩奉報日頃の係申譯も可仕覺悟お罷在ひ此儀も何分寛大の係了簡を
 以て夫迄の内右多罪の段ハ許容奉願ひ猶亦末々の者ハハ不相濟所業も有之其儘

御捨置の難相成筋に奉存ひへ共畢竟立場の取締方不行届故右様の不法に至り
の事より座の間刑罰の儀に我々の立場に被仰付未々の者何卒良民へ返返し被下
置の様仕度旁不堪志願此段書取を以て奉歎願ひ以上

名前七人

○三月

三日 鍋島侯世子淳一郎柳營ニ加冠ス

鍋島淳一郎元服仰付られ御目見係諱係一字並ひ係稱號を賜り被任從四位下侍從
稱松平信濃守茂實 白銀三十枚卷物十御馬一疋加賀國代金十枚右獻上御禮申上
御盃頂戴御刀備前國祐定代金十五枚拜領之

右に付松平肥前守綿二十把金馬代を以て忝元服御禮申上之

十五日 覆面異風頭巾ヲ用井ルヲ禁ス

異風の頭巾一切冠り申間敷旨先年より度々相違ひ處近頃兎角異風の頭巾を冠り
面体を隠しひもの有之以の外の事ひ右風儀武家へも押移り如何の事ひ諸事
先年より相違ひ趣相守可申と云々

十六日 嚴ニ密賣ノ類ヲ禁ス

隠し賣女堅く御制禁の趣前々より度々觸渡ひ處近來賣女は紛敷所業致ひ趣相聞
え以の外の事ひ市中風俗にも拘りひ儀に付穿鑿の上夫々及吟味の間此上心得
違無之様可致ひ若し相背ひ者有之於ては無用捨召捕嚴重の係仕置可申付ひ市
中料理茶屋業にて若き女を抱置き身形を粧ひ客の給仕又は酒の相手ひ差出不取
締の儀も有之哉相聞え不埒の事ひ向後料理茶屋共働き一ト通り抱置ひ仕女
の外衣類髪飾等粧ひひ女子共抱置客の給仕杯ひ差出ひ儀堅く不相成若し内々相
背不取締の儀相聞る於ては無用捨召捕吟味の上嚴重の沙汰可及ひ條心得違
致間敷ひ事但水茶屋女の儀も一ト通り茶汲の外是又怪敷風俗の者差出ひ儀決て
不相成ひ間此旨相心得可申ひ 右之趣不洩様町中可觸知者也
隠し賣女堅く御制禁の趣前々より度々申觸渡有之處近來賣女は紛敷所業の者も
有之由ひ相聞ひ付今般町觸の趣急度可相守旨名主共支配限り一人別嚴重申付
以後猥なる儀無之様可心得若し万一相背ひもの有之ひは其方共於て越度た
るべくひ事

市中寄せ渡世致ひ者近來夥敷軒數を増し殊に兼て申渡を相背き茶番手踊等の申
唱にて歌舞妓狂言は紛敷儀相催ひ儀相聞不埒の事ひ右体の類嚴重差止ひ様可

致若し此上申渡の趣相背ひ者無用捨召捕可及吟味ひ間心得違無之様其方共より組々不洩様早々可申通ひ事

右之通被仰渡奉畏ひ仍て如件

行事

十七日 松平阿波守正四位ニ叙ス

廿一日 外國事務勤勞ヲ稱シテ一万石村替ヲ安藤對馬守ニ命ス

常々出精相勤近來外國御用多端の所格別骨折ひふ付別段の思召を以て一万石村替被仰付之

將軍家移徙慶賀ノ爲メ能樂ヲ柳營ニ行フ

御三家方始め一同登城見物並芝居町人共へ折櫃酒鳥目等下さる先規の如し此後八月廿八日同係能興行其後四月五日同係能興行日光御門跡同新宮増上寺方丈其外出家中登城見物被仰付

輕罪者ヲ免シテ蝦夷地ニ送ル

函館奉行へ達 函館表へ寄場取建輕罪者並女犯の僧等係仕置赦免申付人足寄場の者内へ差加へ且當地徘徊の無宿共捕押へ蝦夷地へ差遣し彼地の係用筋人足等み召遣可申老人婦人たり共當地人足寄場へ入ひ者共端々其外市中にて如何の渡

世致し婦人へ是又同所へ差遣し可申旨早々取調可被申聞ひ事

廿四日 文武勉勵ヲ諸士ニ諭ス

文武迄教育筋の儀ふ付ては是迄厚く被仰出ひ趣も有之殊ふ近來格別ふ世話有之講武所迄軍艦操練所著書調所等迄取建夫々修行仰付られ儀ふへ共方今の時勢彌以て文武迄隆盛無之ひては難相成場合ふ付既ま御直にも夫々迄世話被爲在ひ程の儀ふ付銘々無懈怠相勤め係趣意行届ひ様文學の儀ハ文弱ふ流れを武備の儀ハ粗暴ふ片寄らせ忠誠を主と致し眞實ふ修行を遂げ文武並行はれ係主意よ不違様精々可被相心得ひ

儉素ノ季尙五年ヲ増スノ命アリ

是迄度々迄儉約の儀被仰出ひ處近年ハ別て係事多く相成非常の係備筋御本丸御造營其外難捨置係人用莫大ふ相嵩とては此儘にては係經濟難相立自然迄武備の儀も係十分ふ御行届の譯み至り兼ひよ付尙又當酉年より來る丑年迄五ヶ年の間嚴敷御儉約可被遊旨仰出され御改革の儀段々仰出され有之ひても兎角舊弊よ因循致し事實御省畧難相立只々一旦の事のみ相成被仰出ひ御主意も永續不



致誠より恐入の事有之の間此度の儀ハ銘々格別ハ心懸け假令先例仕來ハ共無益の手續相懸けハ儀ハ相改め都て冗費を省き御入用筋格別ハ相減ト御勝手向追御取直相成ハ様各無隔意心力を盡し可被申ハ畢竟御儉約被仰出ハ御勝手向御差支にてハ武備ハ勿論御救助等迄思召の通り難被遊ハ付無御據被仰出ハ儀より有之御主意不違様專一ハ可被心懸ハ且又銘々一巳の儀ハ嚴敷質素節約を相守ハ様可被致累年困窮の族も可有之ハへども中ハ外見虚飾奢侈等ハ相流れ勝手不如意の輩も有之哉ハ相聞えハ勝手向不如意にてハ勤功並武備の心懸も自くら心底ハ不任様可相成事ハ付常々無益の費を省き大切ハ御奉公武備等無差支様ハ可被心懸ハ別て御役人の儀ハ世上風儀の手本にもハ間尙又厚く相慎ハ聊奢ケ間敷儀等無之様可被致ハ畢竟銘々正路潔白ハ心懸け御爲第一ハ存込相勤ハ儀專要の事ハ若シ心得違の者有之ハ御主意の妨にも相成ハ付無御據急度可被及御沙汰ハ間兼て其旨可被相心得ハ

廿六日 御料租税金半年ノ用途ニ足ラサルヲ以テ諸事省畧スヘキノ旨ヲ三奉行等ニ達ス

閣老より三奉行御留守居大目付御作事奉行御普請奉行小普請奉行御目付へ近年打續き定式の臨時御入用莫大ハ相嵩み無余儀廉ハ有之ハ得共年々御收納より一倍余の御入箇ハ相成此姿にてハ御改革も難被爲届次第にて深ク案事被遊ハ就てハ何れもハ改革無之ハ相成間敷右体ハ收納より一倍余のハ出方ハ相成ハてハ不容易儀にて片時もハ捨置可被置譯ハ無之ハかゝるハ時節ハハ衆心一致いたし假令鎖末の事たりとも聊油斷可仕筋ハ無之ハ連もハ主法替等被仰出ハのみにてハハ備ハ勿論ハ暮方可相立期も有之間敷ハ旨銘々其身を忘れて何事となく厚く勘辨を盡し支配組末々ハ至る迄眞實ハ相心得向後ハ收納にてハ經濟相立ハ様諸場所にてハ省畧の見込早々可被申聞ハ

廿七日 塩谷甲藏若山壯吉博學ニ就テ御目見ヲ命セラル

水野和泉守家來塩谷甲藏松平能登守家來若山壯吉右ハ學問宜く仕ハ段達御聽依之御序の節御目見可被仰付ハ

○四月

十日 方今時勢一變ノ時ニ依テ旗槍弓砲隊長ヲ老輩ニ任スヘカラサルノ旨命令



御旗奉行御槍奉行御持弓頭同筒頭御先手頭御弓頭同筒頭

右ハ武事專要の御役柄ハ處御治世打續キハ付テハ平世勤向其外自然御用少
の場所ハ付及老年御用繁の場相勤續難出來者杯格別の御憐恕にて右御役仰付ら
れハ儀も有之ハ處方今世界の形勢一變致シ外國人居留をも差許相成ハ付テ
ハ聊の行違より何時何用の變事可差起も難計ハ武備兼々嚴重ハ手當無之テハ難
相成ハ時節ハ付向後ハ右ハ役人撰にて仰付られ極老の者ハ仰付られ間敷ハ勿
論老輩にてハ格別武邊の心懸有之筋骨達者にて非常の節ハ用立ハ程の者ハ格別
の事ハ依テハ與力同心共の儀も頭々了簡致シ非常の節ハ差支不相成ハ様兼
テ相心得武備の儀彌厚ク世話可被致右の趣前書の向へ可被達ハ 右之外爲心得
可然向々へも無急度寄々可被達置ハ事

諸藩士諸役人引込月數並死去届等ノ遅延ヲ禁ス
御番方の面々ハ別テ十三ヶ月を限り相願十三ヶ月の外一兩月も病氣保養ハハ
罷出相勤ハ儀相成ハ病氣にてハ其程々定め無之様にてハ無際限儀申出ハ事も可
有之ハ間頭支配心得方にて十三ヶ月の外五六ヶ月も保養にて出難難成ハ様子に
テハ見合願差出ハ様向後可被相心得ハ事

右之通享保三年仰出されハ處近年右の月數より多く引込罷在ハ者も有之並内實
ハ死去ハ小普請入相願病氣届ハ延引致ハ類有之哉ハ粗相聞え如何の事ハハ
享保の度被仰出ハハ實ハ病氣にて不得止事節の儀ハ有之且又死去を押隠シハ宛
行頂戴罷在ハ者ハ後聞儀にて先年ハ仕置被仰付ハ儀も有之旁向後心得違無之様
可被致ハ

右之趣天保十二丑年相達置ハ處兎角心得違の者有之哉ハ相聞え以の外の事ハハ
此以後布衣以上以下ハ役人ハ番方等前々定の月數より多く引込罷在又ハ病氣届
等及延引ハ者有之ハ於テハ急度ハ沙汰の品も可有之ハ間前々觸面の趣違失無之
様可被心得ハ右之通可被達ハ事

布衣以上諸役人老衰者免役セスシテ隠居スルヲ許ス

布衣以上ハ役人の内及老衰隠居仕り度心底にてハ役ハ免相願ハ一旦寄合相成
ハ儀と残念ハ存ト身体不自由にてハ可也立居も相成ハ分ハ取續キハ奉公相勤居
ハ儀も可有之哉右等の分ハ向後布衣以上にてハ及老衰ハ役難相勤者ハハ役ハ免
相願ハハ及ハば勤ながらハ隠居可被仰付ハ間右の心得を以テ可被相願ハ尤も老
衰ハ褒美隠居料の儀ハ都テ前々の振合を以テ可被下ハ

十一日 魯人船ヲ對州尾崎浦ニ繫クニ就テ再ヒ宗對馬守ヨリ届書
目次

魯人破船修理中之陸地借受度事

任破船修理魯人所望則速歸帆否之事

揚船於相應地不改破損則速歸難定事

船修理中一里程之遊歩地魯人所望之事

雖望魯人牛雞野菜牛日難與事

託事於船修企多日滯船哉否對州侯勞心事

宗對馬守より係届 先達て係案内申上ひ魯西亞船の儀今も尾崎村へ滯留罷在時
時端舟五艘三艘宛乘廻し海の淺深を測量し本船にては大砲を打放し或は船狭間
を出替大砲を仕懸け威を示し加勢を致し夷情何共難計ひへ共警衛方専ら差圖仕
罷在ひ然へ夷人共願望の通り修理取計ひへ早速出帆ひ様申向ひ處相當の場所
へ船を引揚げ破損所等得と吟味致ひ上ふ無之ては木材人夫且成就迄の日數難差
極趣申聞右ふ付小家掛け等の儀も相望ひし付最寄の場所貸渡しひ様申向ひ處右
修補中里數一里程も遊歩致し度且食料拂底し付牛鶏野菜玉子所望致ひふ付牛の

儀ハ差送りの儀難相成段申向ひ處先般イキリス船渡來の節取扱ひ振も有之魯西
亞ハ限り願聞濟無之哉の趣手強く申聞ひへ共イキリス船來船以後係差圖の旨も
有之ひ事故牛相與へひ儀ハ決して不相叶遊歩の儀ハ開港場外へハ不相成段係條約
も有之且農業の妨にも相成ひ間是又不相叶段申向ひ處食料無之てハ修理の働さ
も相成兼ひ且遊歩致しひのでハ畫圖の出來も不相成右の條件許容仕吳ひ様申聞
左ひハ早速修理相濟可申ひへ共左も無之ひてハ逗留延引可致杯と我儘申募り
急々船修理取懸りの儀も無之全体の振合船修理ハ專寄せ此先多日逗留の企にハ
無之哉夷情何共難計段々多日の逗留お及び時ハ彌以て國民の疲弊不輕當惑仕ひ
此段申上ひ尤海岸係警衛向無懈怠手當罷在ひ猶此後の動靜追々係案内可申上ひ
二月十九日在所日附四月十一日江戸着

十三日 魯人對州海滯船ニ就テ同國鎮撫ヲ小栗豐後守等ニ命ス

外國奉行小栗豐後守金十枚時服三羽織御目付溝口八十五郎金十枚時服二羽織右
對州へ爲御用罷越ひふ付係暇拜領之其以下役々金銀時服等對州へ係暇し付拜領
有之

廿三日 魯人滯船ニ就テ宗對馬守ヨリ注進三度ニ及フ



廿三日 目次

船修所双方示談難届魯人含憤哉之事

魯人上陸伐木等亂妨之事

魯人建小屋於海岸事

十三日 對州郷士之鎧鎗刀砲等魯人掠奪之事

郷士至魯船強談魯人饗應郷士事

返掠奪之鎧鎗刀砲於郷士却與數品於郷士事

船修小屋場工匠木材等示談之事

先書修届申上の魯西亞船の儀船修復小屋掛場所の儀渠等より相望の所へ此方差障り此方差支無之場所へ渠等あてて不使用の趣申聞其外食物類よ至る迄望の通り多分不相與を内心憤りの哉去る二日何となく船仕舞致し尾崎浦出帆次第内海へ乗入小船越村西の漕手と申所あ繋船致しあ付警衛の人数同所最寄の場所へ立越相固の處夷船の様子是迄と違ひ番船等本船近へ寄附不申ひて端舟あ鉄砲様の物と仕懸番船へ刃を突掛の様子通商免の國柄あ付て此方より決て不開兵端事と見侮りの振合と相考甚敷へ人数十人程揚陸松杉等十五六本勝手あ伐取

り本船へ積入同四日卯の刻同所出帆午の刻頃貝齋村の内玉造と申所へ繋船程なく益ヶ浦五十崎内古里浦と申所へ碇泊夷人共揚陸早速四間あ二間半計りの至て手輕き小屋掛出來居の處船主面談不相届段申聞一向不取敢同六日郷士百姓等十四五人小船一艘あ乗組本船より一二町の處通船仕の處端舟三艘早急あ乘來り左右を取巻本船へ漕付ひよ付乗組の内郷士五人本船へ乗移り應對及び内船中よ有之鎧一領鎗九筋鉄砲九挺刀一本脇差五本本船へ積入ひあ付郷士より死を極めひて取返し方嚴重申達の處間情役人對面の上可相返旨申聞不相返ひあ付郷士一人相残り振張相懸合其餘の者共の漕戻り其段遂注進ひあ付役々其場所へ立越嚴重相懸合の答あひ處右役々不立越以前翌早朝端舟を以て郷士武器共無異儀差返し尤於船中色々饗應致し日本通用の金三兩二分其餘砂糖等與へひあ付何分相斷ひへ共強て申聞の間無是非取歸ひあ付右の長崎奉行へ申達差圖致ひ答あ座の去る八日城下より役々間情使差下右様自儘の振廻あ至り段相尋ひ處魯西亞國あ於て示談延引三十日を越ひへ及破談の國風あ付右様取計ひ材木の代銀可相拂杯申し如何共用捨難相成振合あひ得共前文の通御通り商御免の國柄あ付其場可相成丈け相忍び穩順の處置を以て示談あ及び大工材木等相當の代價を以て賣渡



且又魚菜等欠乏の品少々相與へ且小屋建場所桁間十二丈入三丈貸渡の様及細定の處漸く落着の振合めて申達の通可相心得の間番船等不相附様相願ひ付渠等端舟場廣不乘廻の様申付の處其通可相心得段申聞の右之通の付又々警衛人數相増家老共兩人差下海岸警衛向無忘手當罷在の猶此後の動靜追々案内係届可申上の以上 三月五日在所日附

○五月

三日 魯人滯泊ニ就テ宗對馬守ヨリ注進四度ニ及フ並老臣建白書

目次

雖船修示談修理之機會無之事

寄事於難破船深巧有之哉對州推度之事

數日守備海中孤島兵食不足人民飢渴歎訴事

對州老臣建白

依安永文化兩度御加恩取續國柄之事

不毛同様之瘠土難海岸守備歎訴之事

以來被命對州港浦異船來船嚴禁度事

私領分對州尾崎浦へ魯西亞船來船修理の儀申聞右の條約も有之の事故則及許諾の次第の先達て追々遂に案内の通の座の然處彼船早速修理取計の機會無の座の彼是自儘の儀のみ相望み全体の振合難破船の事寄せ内實の深巧有之哉の被存魯夷意内如何と難計中々急の退帆の勢も無之海中の孤島兵食不足の場所多月の守備實に奔命の疲れ人民飢渴及び段々々々嘆げ敷次第奉存の然る處の通商の國柄と申し殊更被仰出の旨も座の得何分穩順の取計方精々差圖を加へ得共萬一此上難題等追重り輕蔑の舉動相慕の時の如何なる異變可相生も難計深く恐入の次第の座の且又右船の儀退帆の時重て右等の船來船のへハ渠の爲に士民徒飢餓の迫り乍恐本朝の御武威をも可奉汚一州の士民安堵仕の様の指揮方伏て奉願の以上

三月十日在所日附

對州老臣建白書

今般對馬守より別紙の通奉願ひ夫に付對州の儀の往昔より朝鮮交易の餘澤を以て假成に相凌罷在の處の一亂にて通商斷絶し及ひ然る處慶長四年神君様は深慮の旨に依て朝鮮國との和好如の旨意再ハ相整の砌係情交の藩屏防禦の係

役儀被仰付後役料代の譯を以て彼國への交易被差許置ひ處和韓の時勢轉變ふ就て貿易相衰へ安永八年ふ至り交易斷絶ふ及び其節奉願永續爲後手當年々金一万二千兩拜受被仰付文化交易地後新創の用多年相勤め其外國用減ひても厭ひを聊事致順誠ひ儀をも被思召此度の究迫難被捨との後事にて地方二万石後手當被下置追々格別の奉蒙後特恩冥加至極難有仕合奉存ひ是迄右兩度の後恩澤を以て後役職防禦方ふ至る迄假成ふ取續き申ひ處先年外國後通商以來異國船東西沿海の間を乘通り浦々警衛無油斷相心得罷在ひ内去る未年兩度渡海尾崎浦の人家近く繫船懇願の品も有之其砌り野鄙の情態奉添後内聽ひ通の儀ふ有之今般又々魯西亞船同浦口來船初發問情の節船具修理の儀申出ひ條約通り先免申ひ處大造の小屋掛等彼是難題のみ申聞昨今夷人の体深願望の深底と相考へ中々以て退帆の期難計眞偽無覺束ひへ共不日數艘來船の趣をも申聞此上如何様なる難題可申出も難計此場實以て當惑無涯新ふ申上ひ迄も無後座ひ大海中の孤島不毛同様の瘠土人民平常の撫育ふ苦み年來難迫の國体奉歎願莫大の沙汰追々難有偏奉蒙後厚恩國民撫育罷在ひ處右様夷船來船ふ付海岸防禦無覺束若し此後朝鮮國へ意外の異變相生ト貿易相塞ひ節看々國民の飢餓一州の浮沈此一舉ふ迫り自然夷人

共手違の舉動有之節飢餓ふ迫り愚民共如何成弊端可相生も難計實以て不安寢食係る邊土狭小の國柄ながら後邦内の一島不束の儀有之ひて自己の耻辱のみふ無後座奉對 皇國誠ふ以て恐入ひ次第ふ付以來對州浦港へ異船來船不仕様猶又以御威光向後睨と後嚴達可被成下ひ様前件的情態厚く後憐察被成下此場何分國內安堵の道御明裁後下知被成下ひ様奉願ひ以上

三月十日在所日附
十一日 魯人滯船ニ就テ宗對馬守ヨリノ注進五度ニ及フ

目次

魯人託事於船修其實開港之巧有之云事
追々不法雖有之依台命彼暴逆忍居事
我侮不開兵端於彼魯人破關門事
捕縛關門守衛郷士砲殺奴僕魯人亂妨之事
以公儀通商之國柄雖相諭一藩奮激之事
忍彼暴逆則本朝之御瑕瑾雖孤島無援兵一藩攘夷決心之處暫時留置何御指揮事

私領分對州淺茅浦碇船の魯西亞船修理の事寄急々退帆の勢も無之當夏中滯留の由申聞ひ深意の開港の存念も相見え殊更追々不法の舉動有之ひ得共兼て被仰出ひ御旨も有之何角穩順ふ罷在ひ處此方より兵端を開ざる事と見侮り昨十二日夷人共多人數端舟ふ乗組大船越瀬戸關所前兼々差塞置ひを理不盡ふ押破ひよ付固の郷士兩人相制ひ處多人數にて擲捕り渠が船中へ歸掛ひふ付小者安五郎と申者有合ひ薪を投懸けひ處夷人共鉄砲にて右安五郎の胸板を打貫即死及び其儘本船へ罷歸りひ是迄の公儀係通商の國柄ふ付耻辱とも忍せ兵端を不開様と折角制罷在ひ處最早右之通り渠より事を破ひよ付て家中の奮激不一形是非打取不申ひので國內の怒氣解散の筋更ふ無之武道より取り耻辱の限奉存ひ如何様にも奉恐入ひ儀ながら全く一巳の儀ふも無之 本朝の御瑕瑾共相成ひ事故兵食不足進退四方大洋の國柄援兵の頼も無之始終の勝算千万無覺束奉存ひへ共眼前亂妨罷在ひ夷賊其儘難免ひふ付不顧後患討取可申決心仕罷在ひへ共右の至大の事柄ふ付無理ふ暫く取押置ひて一應奉經御伺ひ間何れの道速ひ人心一定の係指揮偏ふ奉願ひ尤も前書の通り渠より好で事を發ひ機會ふ座座ひ事故何時可及戰爭も難計ふ付其節ふ至り時位不得止事情御憐察被成下ひ様深く奉願ひ以上

四月十三日在所日附

對州侯攘夷決議ノ旨ヲ一藩ニ布告ス

今般碇泊の洋夷追々輕侮の振舞不堪憤怒ひへ共當家より兵端を開ひ儀の大切無限ふ付是迄相忍居ひ然處此節於大船越固の者及殺害ひ一件最早渠より事を破りひ事故是非打取らせて難叶場合ふ付則戰鬪ひ令決心ひ一應公邊へ不申上置ひて一皇國一般ふ相係り恐入ひ次第より付早道を以て其段相伺ひ然る處宗氏の存亡爰ふ決ひ事故假令兵食不足ひ共州中一致拋身命家名不汚ひ様精忠頼入ひ事
十三日 魯人滯船ニ就テ宗對馬守ヨリ注進六度ニ及フ

目次

魯人捕瀬戸浦番所人並武器諸品掠奪事

郷中民家金銀米穀牛馬等魯人掠奪事

雖以台命諭憤怒頂上之人氣迫旦夕急速御決斷奉願御指揮事

追々案内申上ひ領内滯船の魯西亞船去る十三日大船越瀬戸ふ於て小者安五郎と申者を鉄砲にて打果し固の郷士二人擲め捕不法の所業増上及び段々翌十三日附を以て係指揮奉伺ひ通ひ座座然處十三日又々夷人共凡百人余端舟數艘ふ

乘組大船越瀬戸番所前へ乗來り同所の儀ハ瀬戸通行の小船相改ハ迄の番所にて
殊ハ異船繫泊の場所程遠ハ付固の人数も無之を見込直様揚陸取圍み番人二人足
輕一人引立端舟へ乗せ置番所ハ在る處の武器類諸品ハ至る迄奪取夫より村中へ
對シ亂妨狼藉及郷士の武器類ハ固より民家在合の金銀錢米穀品物且小家々々ハ
繫置シ牛馬七疋掠取り端舟ハ取乘り本船ハ漕歸ハ右之通追々の亂妨次第ハ差募
ハハ共何分兵端を不開様ハと厚く相諭シ罷在ハ故夷船近邊の村々ハ無詮方退散
ハ及び所々へ野宿罷在ハ様の儀ハて哀れ至極の爲体ハ罷在此場ハ至ハてハ何程
穩順の道相盡シ度千變万化加下知ハても憤怒頂上の人氣甚以て無心元最早事且
夕ハ相迫り不安次第奉存ハ此上猶又必至ハ差圖を以て暫く取押ハ罷在ハ偏ハ
皇國一般の儀ハ一大事と奉存ハ昨十三日附を以て委細奉認置ハ然る處只今ハ至
ハ却て 本朝の御武威を奉汚ハ場合可押移哉と深く奉恐入ハ躰勢御賢明被成下
何分速ハ御決斷ハ指揮の程偏奉願ハ以上 四月十四日在所日附
魯人滯船注進ニ就テ台命ヲ對州ニ下ス
其方領分魯西亞船渡來ハ付追々被申聞ハ趣も有之ハ間先般小栗豐後守溝口八十
五郎被差遣且函館在留魯西亞コンシユルハ右爲引拂方函館奉行より爲相達ハ

趣も有之長崎奉行よりも支配被差遣ハ趣ハハ間最早同人共到着ハも可有之彼方
遂談判事情相分ハハ以後無法の舉動等も有之間敷畢竟彼我言語相通セ邊よ
リ自然間違等も可有之双方の行違より不容易儀を引出シハてハ以外の儀ハ付
家來末々迄能々諭告致シ諸事豐後守等へ承合取計ハ様可被致ハ事

廿日 和宮關東ニ下ルニ就テ勘定奉行小笠原長門守京都ニ使ス

御勘定奉行小笠原長門守右ハ 和宮様ハ下向ハ付ハ入用筋爲取扱京都へ被差遣
ハ條可致用意ハ 同廿六日ハ暇金七枚時服三羽織被下之

彗星乾方ニ出ツ天文方建白書

此頃每宵乾方彗星出現ハ付天文方上書寫

彗星ハ西說ハ寄ハハ一種の行道の違ハハ星ハて限リも無キ遠天より太陽天へ
環リ來リ並ビ遠天へ還リハ星ハ有之太陽天へ近づキハ節ハ自然地ハも近く相成
ハ事故人目ハ見え遠天へ還リハ得ハ地ハ遠く相成ハ故人目ハ及不申ハ其行道皆
長象形ハして各長短不同故再出の年間遠キハ八九年其最近キ者ハ三ヶ年余ハて
再出の年間一周仕ハものも有之ハ右様數年來測量仕リ豫メ再出の時節を推歩致
ハ程ハ相成ハ上ハ決て妖星と申ハハ無之一種の奇星と可申程の儀ハ座ハ漢土

にての兎角吉凶の點候有之多くの舊きを除き新を布く杯申ひへ其形容篠よ似寄ひを以て支那人の文を巧みふ認め様よ存ひ當今専ら西洋究理の説採用の折柄ふ付私共於後役筋にも吉凶の有無の儀の差置ひたすら測量のみ必志を盡し罷在ひ且又其色は隨ひ其現るゝ場所より兵革水火の災或は國王大臣の患杯と漢説ふ相見ひ得共明和六年七月の彗星の其長サ七十度は余り光芒の兩脇へ相見ひ由舊記に相見至て異様の形狀ふ得共別ふ奇異と申程の儀も無之由申傳ひ殊ふ彗星の天際に現れひ日本計ふ相見ひよ無之万国共に見受ひ事故素より何れの國誰の人事と吉凶ふ拘りひ儀の毛頭有之間敷ひ事

廿九日 浪士兵器ヲ携へテ英人旅館東禪寺ニ亂入ニ付警衛諸隊ヨリ届書

宮崎七郎左衛門届書

昨廿八日夜四半時頃英國人宿寺高輪東禪寺へ浪人体の者十五六人程亂入館前へ駆付戰爭よ及び多人數へ手疵負せ討取ひ者三人生捕一人残りの者逃失ひ由尤も英人の内薄手を負ひ者二人有之ひ得共ミニストル其外別條無座座且又用出役の内手負並討死の者別紙に記申ひ後支配内より出役ひ者に格別の怪我等

無座座此段書付を以て後届申上ひ以上

別紙手負討死姓名小十人組肝煎雄太郎養子天野岩太郎^{十三}深手右頼二寸余○小

普請組勘助弟北條薰三郎^{二十}薄手右の手○御書院番源五郎弟柘植鐵吉^{三十}薄手

右の手○新御番鐵之助惣領河野虎吉^{十二}左の指二本○小普請組實之助惣領中尾祐

太郎^{十八}深手右の手○小普請組於菟次郎惣領今井善十郎^{三十}薄手左の足○同組松

平次郎肩少々○同組深澤阿太郎^{二十}鼻計○同組肝煎大貫増吉^{卅五}左の足二ヶ所

○大御番吉左衛門養子江幡吉平討死○表門番倉田孫太郎^{二十}薄手頬右の手○夷

人料理人薄手右の肩手足並腹○別當一人即死○山番一人深手○夷人門番清兵衛

^{五十}肩腰○松平時之助家來川邊助十郎深手鼻足○同家來上原瀧之助手眉間一ヶ

所○同家來横地豊三郎薄手一ヶ所

右之通座座以上

和州郡山松平時之助届書

昨夜四半時頃高輪東禪寺へ狼藉者多人數押入ひふ付早速家來共差出ら及防戦浪人体の者三人討留一人手疵負せ逃去ひ處松平和泉守家來取押申ひ殘黨も有之ひふ付境内嚴重兪儀有之ひへ共闇夜の儀何れも逃去ひ哉行衛相知れ不申尤も家來

手負の者三人は座ひ此段先居申上ひ以上
別紙今朝居申上ひ通昨夜東禪寺へ狼藉者多人數押込ひ節對戰仕ひ家來の内手
負左之通 鐵砲方上原瀧之助薄手 横地豊三郎薄手 川邊助十郎深手
右之通座座ひ以上

松平和泉守居書

昨夜四半時頃高輪東禪寺へ怪敷者多人數押込ひ付固の家來共早速上洞庵へ罷
出ひ處持場内にて怪敷者一人召捕ひ付相糺ひ處浪人柳鉞三郎と申者當西十九
の由懷中ひ存意書と認ひ封物有之ひ間其儘外國奉行支配調役大塚九左衛門へ家
來の者より相渡申ひ尤も加勢人數差出ひ嚴敷相固能ひ委細の儀ひ追て可申上
ひへ共先此段居申上ひ以上

浪士英人旅館高輪東禪寺ニ亂入スルノ巷説

何方の者とも相分り不申品川宿二丁目旅籠屋渡世虎屋方止宿致と多分の金錢
遣捨ひ付虎屋より各主迄斷届致し由然る處廿八日夜四半時頃外國人宿寺高
輪東禪寺表門内竹矢來南側切破り浪人体の者廿一人程白布にて後ろ鉢巻脚半小
袴着用にて切込ひ付詰合の番士並固諸侯人數出會防戰夷人とも鐵砲打懸ひ

ひ付浪人徒黨の者散亂東禪寺表門内即死一人年頃三十位同地中即死一人年頃二
十二三郡山詰所前即死一人外一人生捕未た姓名相分不申麻布十番借馬別當熊吉
即死小使二人手負係固人數の内怪我人も有之由外ひ虎屋にて浪人体の者三人切
腹東禪寺門前大小二腰捨有之右生捕の者懷中ひ連判帳有之名前十五人右姓名書
を以て引當ひ處左之通○頭取有賀半彌行衛不知○前木新八郎同斷○柳鉞三郎深
手生捕○渡邊剛藏行衛不知○山崎權之助虎屋にて自殺○大井與四郎同斷○森半
藏行衛不知○小堀虎吉東禪寺にて即死○中村貞助虎屋にて自殺○黑澤五郎兵衛
行衛不知○岡見留次郎行衛不知○木村幸之助行衛不知○矢澤金之助行衛不知○
古川主馬東禪寺にて即死○石川金四郎行衛不知白布鉢巻一筋落し有之其文曰
天下浪人行年十八歳木村幸之助と認め有之

武州下目黒村陸田中捨物有ルニ依テ訴書

増上寺御靈屋料武州荏原郡下目黒村百姓彌三郎召仕惣吉儀今朝六半時頃農業罷
在ひ處村内字下道往還端彌三郎所持畑の内捨有之ひ白木綿筒袖締絆一ツ兩袖ひ
血附脊み文字有之其文曰爲天下命輕塵埃天下浪人舍生取義者也本延治行年十
八歳 常陸路にひくる月日のなりりせひけふをかきりの命とそしれと認め有り

晦日 東禪寺ニ捕フル浪士神鉞三郎ヲ生駒徳太郎邸ニ幽ス
 神鉞三郎吟味中生駒徳太郎家來へ預被仰付同人懷中連判帳有之姓名十五人
 英人旅館警衛郡山西尾兩侯ニ褒詞ヲ賜ハル
 松平時之助へ御褒詞一昨夜高輪東禪寺へ浪人共押込及亂妨家來共浪人打留の段
 平日申付方宜敷故の儀追て沙汰の儀も可有之
 松平和泉守へ同斷一昨夜高輪東禪寺へ浪人共押込及亂妨家來共取計方宜敷趣
 付追て沙汰の儀も可有之

對州鎮撫使小栗豐後守等ノ書簡江戸到着

小栗豐後守溝口八十五郎 私共儀去る七日對州表へ無滞着岸直ヨ魯西亞人へ及
 應接の處魯人申立の差當り領主へ面會の儀申立滞留中彼是世話相成且船
 修理の儀不容易厄介付謝禮申述度との趣付其儀及不申謝禮の儀ハ政府へ
 可申達の領主へも宜敷可申述面會の儀斷申の處聞入不申付未た國人折合無之
 儀と申談の處彌申募り是非押寄ひても不遂面會ハ日本和親の程無之迪更ハ聞入
 不申の付猶品能く申談し兎も角も國人折合の迄暫く差延吳の様説得漸く聞入
 申の未た亂妨等の儀談判に及り不申の右ハ着船不取敢應接の次第申上以上

○六月

朔日 蝕朝四時ヨリ同八分ニ至テ終ル

二日 東禪寺亂入ノ殘黨石川金四郎ヲ山名主水助邸ニ幽ス

石川金四郎吟味中山名主水助へ預被仰付

三日 武家屋敷替年限十年ヲ五年ニ換フ

相對替致しの屋敷又ハ相對替願の儀是迄十年不相立ひてハ難相濟の處以來ハ五
 ケ年目より相對替願ハ共不苦の間此段向々へ寄々可被置の事但新規屋敷拜領
 の面々も三ケ年不相立ひてハ相對替願不差出ひ得共以來ハ年限ハ無構相對替差
 出不苦の間其段も向々へ可達ハ事

十六日 東禪寺亂入ノ殘黨ヲ穿鑿スルノ命アリ

當五月廿八日夜高輪東禪寺外國人旅宿へ亂入致し不届及仕業逃去の者共の内姓
 名書 有賀半彌岡見留次郎前木新八郎森半藏矢澤金之助渡邊剛藏黑澤五郎右の
 者共儀常州出生浪人の由相聞逃去の付怪敷体の者見請ひハ其所ハ留置早々
 料ハ代官私領ハ領主地頭へ申出夫より江戸月番の町奉行へ可申出ハ若見聞ハ
 及ハ其段も可申出ハ家來のもの等入念可遂吟味隱置の儀ハ勿論等閑ハ致置

脇より相知れぬ可爲曲事者也 右之通可被相觸ひ
翌十七日水戸殿へ後達

右の領内殘黨の者共の儀お付是迄寛大の處置お相成居ひ處今以て兎角折合
兼ひ趣み付今般嚴敷手配有之悉く召捕被成ひ様被仰出ひ就て此上徒黨ケ
間敷儀相企ひ者有之ふ於ては人数差向領内にて取鎮若し不法の働有之
ひは速に討取可被成萬一及運滞の節は沙汰の品も可有之

廿二日 百姓町人大船所持免許

百姓町人共大船所持致し儀差許相成ひ間勝手次第製造致し不苦ひ且又外國
商船等買受度ひ者へ最寄港奉行へ可申出ひ右船所持致し上は國內手廣運
漕差免可相成ひ尤も航海不事馴差支ひ者へ願次第按針の者並水夫等貨渡可
相成ひ尙航海手續等委細の儀追て可及沙汰の扱又右船製造且買受ひ者へ其節
船形繪圖を以て當人又へ代官領主地頭より軍艦操練所へ可申出ひ事
右之通沙料の代官私領の領主地頭より可被相觸ひ事

廿三日 異風筒袖並冠物制禁

異風の筒袖異様の冠り物へ着用不相成趣兼て相觸置ひ處近頃密々着用致し族

も有之由如何の事ふひ以來心得違無之様可致ひ尤も軍艦方其外大船乗組の者
且武術修業の者筒袖無之ひて差支ひ分船中又へ稽古場を限り外國人の服は紛
敷無之様仕立相用ひ儀へ不苦ひ百姓町人共の儀も職業筋商賣体へ寄り筒袖着用
雪中皮履相用ひ儀是迄在來の品へ不苦といへ共外國製ひ紛敷相仕立ひ儀へ不相
成ひ條心得違無之様其筋々より堅く可申付ひ事
右之通可被相觸ひ事

廿七日 仙臺侯參府猶豫再願

私儀蝦夷地の内領分お被成下守備開壁等の儀厚く被仰出お付願の上守備等行届
ひ迄當分九月參府三月暇可被下旨被仰出當年も九月中參府可仕儀お座ひ處
參府猶豫被成下國政手當向世話仕度ひ様奉願度得内意ひ處難整旨何とも當
九月中參府の様可致旨差圖座ひ右様差圖の上へ兎も角も參府勿論の儀は
座ひ處最前も相伺ひ通年來國中疲弊の處近來國事繁多何共捨置難き公務は付
万般手當仕り當節お至り財用必至と差迫四民撫育無覺束不得止事奉願筋は座
ひ參勤交代仕ひへ尤事務の儀は座ひへ共國中撫育も是又相弛め難き大事にて
兩ながら欠き可申様無之處國元手當行届ひ道さへ相立ひへ參府猶豫奉願ひ

存意の素より無座座のへ共任被成下の國中四民撫育手拔有之めての根本相立不申隨ての當時專務の被仰付の蝦夷地警衛筋へも相響さの間乍恐今度參勤の儀係猶豫奉願基本を相立兼て外地警衛も十分の行届猶參府をも追々無滞相勤の様仕度奉願の當時國中難捨置事態の委細家來共より添書を以て奉願の間係出格の評議被成下度奉願の依之今一應得の内意の上の猶宜敷の差圖可被成下の以上同家來より差出の書面畧之

對州人民不平小栗豊後守等遁歸ル巷説

巷説小栗豊後守等當四月十三日對州鎮撫御用を命せられ彼地へ出張致し公儀風を吹せ對州人を邊陲と侮り魯人と同意對州港を開くと企つ依て國民大あ不平一揆徒黨所々蜂起し既小栗氏等を討んとせり依て小栗溝口等危く散々あ迹出大坂あ來り待合せ漸く從者相集り夫より歸府すと云其故を以て對州魯人事件相治り不申依之七月廿日あ至り猶亦鎮撫御用として野野山丹後守小笠原攝津守等被仰付對州表へ出張致し處小栗氏等魯人と對和の上對州黒瀬芋崎と云處へ魯人開港旅館所取建凡一万四千兩も相掛り由然りといへども國民不公儀の役人を追拂ひ勢ひ故何分にも國民穩ならせ其故り魯人

も引拂ひ函館へ相廻り趣を以魯人居ざりし由依之野々山氏等函館へ文を致し迎も對州の開港不相成趣を以て前書旅館所一万四千兩の入費何程償金出せしや若干の財を出し相濟し右旅館所取崩し漸く人心を治め野々山小笠原等の翌戊三月歸府すと云

前的小栗豊後守作言を以て歸府致し故歸府早々六月廿八日函館係用且時宜あ寄り對州へも可被差遣旨命せらる依之病氣申立係役免然る處其後數月を経て小栗豊後守係勘定奉行を命せらる斯る小人をして内外の政を取らしめ慶應三丁卯あ至り万石以下知行半高収納金取上など皆小栗氏等の所爲なりと經曰小人之使爲國家災害並至るとりや終る國を失ふ是又所謂獅子身中の蟲の一人なり嗚呼後世恐るべし

廿八日 小栗豊後守溝口八十五郎函館御用ヲ命セラル

外國奉行小栗豊後守目付溝口八十五郎右の函館表へ爲御用可被差遣の間用意可致の尤も時宜あ寄り對州表へも可被差遣旨被仰付之追て七月廿六日兩人共病氣申立て係役免

○七月

四日 日本海測量ヲ英人ニ許ス

神奈川長崎函館への海路暗礁等多く是迄度々破船有之難儀由り付此度英國測量の儀申立人命にも拘り儀付差許相成且 御國お於ても追々大船出來航海致ひ事故巨細も測量不行ひて差支可申間右英國軍艦へ外國奉行軍艦奉行目付支配向の者共爲乗組一同測量致させ追て繪圖面出來の上へ夫々へ渡可相成ひ右よ付て場所寄り上陸も致し測量勿論食物等積入ひ儀も可有之ひ其旨乗組の役人より申談次第惣て不都合の義無之様可被取計ひ事

六日 英船勢州海ニ入ル可カラサルノ旨藤堂侯ヨリ上書

神奈川より長崎函館への海路暗礁多く是迄度々破船有之及難儀由りて此度英國より測量申立差許相成り付英國軍艦へ外國奉行軍艦奉行目付支配の衆係乗組越え付差違の趣承知仕ひ右海路測量の儀お付て無論伊勢海へ乗込申間敷と奉存ひ萬一右内海へ乗込儀おて御廟も有之間右の地相穢ひ様の儀有之て恐入ひ次第お付志州海より内へ乗込不申ひ様係取扱被成下度尤も測量の儀乍不束和泉守家來假也心得居ひ者も有之の間其段の差支に相成間敷奉存ひ故旁以て係乗組役人衆初へ夫々御達相成ひ様仕度ひ

十一日 外國ニニストル館ヲ品川御殿山ニ建築ス

診勘定奉行松平出雲守外國奉行水野筑後守野々山丹後守鳥居越前守目付松平備後守 右品川御殿山の内外國ニニストル被差置ひ屋敷取建の係普請御用取扱被仰付之

諸役人ニ調練往復乗切登城ヲ許ス

諸番頭諸物頭諸役人向後一ヶ月兩三度づゝ中屋敷等へ罷越し家來共調練等の世話致し實備相立ひ様厚く心懸可申ひ右お付て往還乗切係免係城より罷越又ひ其儘登城致しひても不苦ひ萬端輕便お取計ひ手敷不相懸ひ様可致ひ若し心得違不取締の儀も有之お於て急度係沙汰可有之ひ

廿日 再ヒ對州鎮撫使ヲ野々山丹後守等ニ命ス

外國奉行野々山丹後守御目付小笠原攝津守御勘定吟味役立田録助右對州表へ爲御用可被差遣ひ間用意可致ひ○同廿五日金時服拜領其以下役々へも金銀時服等御暇お付被下之

○八月

八日 東禪寺事件勤勞ヲ謝シ英人物ヲ贈ルニ依テ郡山藩ヨリ伺書

嘉永元年閏七月廿七日
我皇御紀
我皇御紀
我皇御紀

八月八日松平内時之助伺 當五月廿八日高輪東禪寺イキリス人宿寺へ狼藉亂入
ひ節相働ひ家來共へ一昨六日夕同寺へ相招きミニストル謝詞別紙の通贈物有之
ひへ共右品受納致ひ儀にも座座ひ哉此段奉伺ひ以上別紙贈物の覺十六品石川治
助へ十品上原龍之助へ十四品谷澤鉀之助へ十六品横地豐三郎へ十七品八十島惣
助へ十三品山村留次へ十四品中村伊三郎へ十七品川邊助十郎へ十八品山口民之
助へ十三品野村虎吉へ

十日 和宮江戸着輿ノ次第ヲ諸司代ニ達ス

被爲止板橋驛御滞留直清水屋形御着輿事

從清水御屋形嚴儀御行粧可宜事

和宮様下向の旨板橋宿へ十日迄逗留夫より嚴儀の儀行粧にて御入城可被遊ひ
處同宿より御城迄の道程二里も有之余程の儀道法にもひへ嚴儀の儀行粧被爲
整ひ儀如何可有之哉若し風雨等の節別て儀不都合の程も難計心配致ひ一体板橋
宿の儀ハ江戸近にひへ共邊鄙の土地にて宿柄も不宜ひ付同宿迄逗留の儀ハ
儀差支の筋不少且ハ風雨等にて御入城儀日限儀差延にも難相成次第付板橋宿
へ一日迄逗留の代り同宿より清水迄屋形へ被爲入同所にて迄逗留の上御入城被

遊ひへハ万端儀都合も宜く且風雨の節迄延引被仰出聊儀差支無之儀入城の儀道
法も程能ひ如何様共迄取調迄出來且ハ入城の儀晴れの儀行粧にも被爲在ひへ
ハ公方様迄始迄透見も被遊輿向女中其外内々拜見も出來ひ得ハ可然と存ひ得共
板橋宿より直ひ入城にてハ右様迄透見等の儀場所も無之清水迄屋形被爲入
ひ得ハ入城の節吹上上覽所の前より同所迄庭迄構外通迄通行相成ひ間迄同
所於て迄透見其外の儀都合も宜く夫より半藏御門廻町四谷御門通ひても被爲
成ひ得ハ道法も相應ふ有之場所柄の儀付道筋儀差支の儀も無之嚴儀の儀
行粧十分整へるべく奉存ひ尤も嚴儀の儀行粧場所等勘辨致ひ得共清水屋
敷の外何分可然儀場所無之儀同所ひ得ハ供奉の堂上方其外旅館の儀も右迄構
内並最番松平豊前守上屋敷も有之辰の口 勅使旅館邊も格別欠隔不申夫是と都
合ひ相成り板橋宿より嚴儀の儀行粧にて入城と申す儀當地都合何分右様ハ
難相整ひ役々一同より申出實ふ不都合の次第付一同評議の上前文の儀手續よ
り取計方も無之儀付其段相心得其筋へ申上置ひ様可被致ひ以上

十一日 鍋島侯百五十封度ノ筒三挺ヲ幕府ニ上ル
十五日 尾州侯閣老安藤對馬守ノ濃州村替ヲ拒ム

嘉永元年閏七月廿七日 二十八 俄首刊載書

今般美濃國御料所安藤對馬守殿領地内村替被仰出ひし付係易地所相成り村々御吟味の風聞有之ひ然處同國土岐郡の儀へ尾州地續にて土岐川と唱ひ川筋尾州庄内川へ流れ出で春日井郡瀬戸村にて數百年燒立來ひ陶器燒物の儀由緒有之ひお付土岐郡より燒出ひ陶器の右藏物附屬の一手の取締を以て三都を始め諸國爲積送工商永續筋取計ひ規定有之其上右川筋連々砂高相成り出水有之節の耕作場へ溢れ又圍堤切合國害不少お付尾州地深山にて年來土砂留普請仕り其上樹木不伐取様留山申付苗木植方山林生育取計置ひ間郡中御料所へ移易地へ御撰の儀被相除ひ様被存ひ此段厚く御評議可被成下ひ同廿日し至り安藤對馬守へ先達て思召を以て村替被仰付ひ三河國額出郡美濃國方縣郡厚見郡本巢郡陸奥國柴田郡磐瀬郡の内高一万三十九石余上知被仰付代地として三河國室飯郡八名郡遠江國山名郡敷知郡美濃國羽栗郡席田郡土岐郡可兒郡多藝郡厚見郡の内込高共高一万七千八百三十七石余被下之

廿四日 櫻田事件吟味掛役人ニ物ヲ賜フ

寺社奉行青山大膳亮へ時服五大目附山口丹波守へ時服三町奉行黒川備中守へ時

服三御勘定奉行酒井隱岐守へ同上御目付神保伯耆守へ卷物五右大關和七郎初筆一件吟味格別骨折ひお付下さる其外組頭調役御代官留役等へ金銀時服等の被下物有之

東禪寺事件英人警衛ノ諸隊ニ物ヲ賜フ

松平和泉守へ 當五月廿八日夜高輪東禪寺イキリス人旅宿へ徒黨及亂妨ひ者有之ひ節同所へ相詰ひ家來共取計方行届ひ段常々申付方宜敷故の儀と一段の事よ被思召ひ此段可申聞旨上意

松平時之助へ前同文言 家來共格別相働き討取の者も有之ひ段畢竟常お申付行届ひ儀と一段の事お被思召ひ依之時服十係鞍轡被下之

外國御用出役の者左之通 大御番長兵庫へ金一枚時服三右へ當五月廿八日夜東禪寺英人旅館へ徒黨亂妨ひ者有之ひ節早速罷出出役の者等へ指揮致し格別骨折ひお付被下之○小普請森川岸五郎へ金七枚○多門舍人へ金十枚右同斷の節長應寺へ相詰ひ處右次第承り及び早速駈付骨折ひお付被下之○小十人天野岩五郎へ金三枚時服二右同斷の節狼藉者組伏討留相働ひお付被下之別段の譯を以て被召出小十人組へ係番人被仰付○小十人中尾祐太郎金三十兩右同斷の節致手合相働

ひは付被下之別段の譯を以て一生の内は扶持方二人扶持被下之○小十人澤井楨之助金二枚時服二右同斷の節早速罷出手合致し相働ひは付被下之別段の譯を以て一生の内は扶持方五人扶持被下之○小普請今井善十郎金三枚時服二右同斷の付被下之別段の譯を以て同斷十人扶持被下之○小性組虎之助弟安藤銃太郎金二枚時服二右同斷の節場所相固め骨折ひは付被下之別段右同斷五人扶持被下之○御書院番柘植鉄吉金二枚時服二右同斷は付被下之別段右同斷五人扶持被下之○小性組大膳弟正木松次郎金一枚時服二此以下十三人同斷右は早速罷出手合致し相働ひは付被下之○松平時之助家來津田市郎右衛門時服二銀十枚同斷の節手合致し指揮行届ひは付被下○同家來石川治助上原瀧之助谷津鉦之助川邊助十郎へ時服二白銀三十枚づゝ被下右同斷の節手合致し狼藉者の内討留相働ひは付被下之外八人の者へ右同斷相働ひは付白銀等被下之

○九月

三日 二御曲輪内外ニ於テ操練ノ爲メ空砲ヲ發スルヲ許ス

右砲術稽古銃隊操練の儀は付ては追々被仰出ひ趣も有之は處居屋敷場所柄は寄り足並操練の砌り空砲打放ひ儀も差支有之不便の趣は付以來二の御曲輪内外屋

敷々々角場無之向々のみ場所は寄り模様次第玉目二匁小筒を限り空砲打放し御差許可相成ひ尤も場所並地所の廣狹隣家地界の模様も有之儀は付相願ひ向へは爲見分は目付支配の者可被差遣ひ條可被得其意は事

十四日 和宮京都發興日限並通興ノ路ハ前後三日間人民ノ往來ヲ

停ルノ達

和宮様御下向御發興御日限十月廿日右之通被仰出ひ 和宮様御下向の節御道中御晝休御泊其所の領主在村の面々領分の内於御泊御機嫌伺として加納遠江守旅宿へ使者可被差出ひ尤も御肴差上ひは不及御小休御晝休にては使者にも不及且御供の面々旅宿へ見廻りひ儀可爲無用在江戸の分も右は準は事○和宮様御下向の節旅館前後共は旅行前後三日路程御用の外旅人往來差留ひ事 旅道筋宿村並枝道間道等右は準は留切は料は其所の代官手附手代共差出は私領は領主地頭より家來差出は警衛向嚴重は行届は様可被取計は事

廿四日 御譜代取締ヲ小笠原信濃守ニ命ス

小笠原信濃守へ御政事向御改革の趣意は付ては御譜代衆取締の儀先達て酒井左衛門尉柳原式部大輔奥平大膳大夫松平丹波守へ相達置ひ處左衛門尉は隱居式

部大輔ハ卒去ル付右代リ其方相心得可申旨係沙汰ハ委細大膳大夫丹波守へ相談致シ可被取計ハ奥平大膳大夫松平丹波守へ前同文言小笠原信濃守相心得可申旨係沙汰ハ段相違ハ間得其意可被申談ハ事

隠賣女九十人入獄巷説

去月廿八日頃より追々兩國邊並淺草入丁堀今春新道最寄隠し賣女ハ紛敷キ及所業ハ女子共九十七人程兩町奉行組の者吟味の上入牢ハ成ル由其中ハ井伊掃部頭休息にて去春中暇出五人扶持捨持出ル者右ハ休泊屋敷重藏店竹次郎姉コウ廿九歳此もの容儀至て艶美にて一ヶ月金五兩ツ、の圍妾ハ相成居ヒト云々

○十月

八日 和宮江戸城ニ着輿ノ道筋

和宮様御下向係道筋板橋宿より巢鴨通り土井大炊頭下屋敷前通駒込片町阿部錦次郎下屋敷裏門前森川宿より加賀中納言屋敷前より神田明神前通り旅籠町を右へ昌平橋より松平左衛門尉屋敷前脇より太田筑前守屋敷脇前より右へ板倉主計頭屋敷脇と左へ一橋御門竹橋御門清水屋敷へ右之通久世大和守殿へ伺相濟申ハ

○來月十五日和宮様清水屋敷へ着其後嚴儀の行粧にて係本丸へ可被爲入ル節共道筋並ハ見通シの屋敷大門潜共閉置キ長家等ハ蓋致シ可申事往來人留の儀ハ都て係成之節の通ハハ事ハ道筋の場所掃除致シ可申事ハ道筋屋敷々々破損の場所等不見苦敷様手入等致シ可申事ハ

十日 内海臺場ニケ所守衛ヲ松平越前守ニ神奈川邊警衛ヲ酒井雅樂頭ニ命ス

松平越前守へ内海係警衛被仰付二ノ臺場六ノ臺場係預相成ハ防禦の手筈兼て嚴重可被申付ハ尤も内海係警衛の面々可被申合ハ依之神奈川横濱邊係警衛の儀ハ係免被成ハ酒井雅樂頭へ神奈川横濱邊係警衛被仰付ハ諸事嚴重可申付ハ真田信濃守へも同様被仰付ハ間可被相談ハ

右之趣海岸領分知行有之面々へも可被相觸ハ事

廿四日 種痘所ヲ改メテ西洋道學所ト唱フ

種痘の儀以來西洋道學所右之通唱替相成ハ間向々へ寄々可被相運置ハ事

○十一月

朔日 竹内下野守等ヲ佛英其他諸國ノ使ニ命ス

御勘定奉行外國奉行兼帶竹内下野守へ金十枚時服三羽織外國奉行神奈川奉行兼帶松平石見守へ同上御目付京極能登守へ金十枚時服二羽織外國奉行支配組頭柴田貞太郎金三枚時服二羽織日高圭三郎金二枚時服二羽織定格後徒目付福田作太郎同上寄合醫師祐庵養子高島祐啓同上 右者フランス國イギリス國其外國々へ爲用罷越ひし付修暇拜領物有之○追て翌成年正月晦日附の文通寫前畧然の昨夕南天竺の内錫蘭へ入津即日陸今日歸船の積り只今旅宿にて爲用狀差出の趣承知仕り只々爲無事の段得貴意ひ去る正月廿日東天竺の内新嘉坡出帆一昨廿八日當國の内ナリシニヤレト申す所へ立寄り昨廿九日入津仕ひ處兼て及承ひ赤道直下故り炎暑凌ぎ兼申ひ船中へ別て暑強く困入申ひ先是迄の病人等も無之ひ得共余りの炎暑故一統案事居申ひ乍然爲地の三伏と申す程にも無之皆氣丈罷在ひ 當所へ釋尊師の爲地故彼是と存ひ得共言語不通漸く尊師の母公並尊師の墓所等繪圖面見當り荒増寫取申ひ土人の風俗其外共夫々畧圖ひ致し持歸可申ひ 船中着無之長崎以來當所にて少々給申ひ 猛獸異鳥も多分の趣し爲座ひ得共上陸中寸暇無之見受不申烏の日本と同一事燕も同様也尤も余程少く爲も小さく羽も少々異り申ひ昨夕船中にて鯛一尾見當り申ひ處本邦の通りおひ得共

細長と其外種々申上度事件有之ひへ共大封を憚り君上初め大丈夫とひ左右申上度小子今日上陸入湯致し度相望みひへ共分りりね水よて洗足致しひ謹言

戊正月晦日 南天竺の内錫蘭の内コールより發ス 姓名

五日 將軍家茂公亞國ミニストルヲ柳營ニ見ル

十一日 物ヲ伊豆島小笠原島等ニ使スル者ニ賜フ

外國奉行水野筑後守へ金十枚時服三羽織御目付服部歸一金十枚時服二羽織外國奉行支配調役由比太左衛門金二枚時服二御勘定保山宇平太同上 右伊豆國付島島並小笠原島へ爲用として罷越ひし付拜領物

外國奉行大久保越中守右伊豆國付島々並小笠原島爲開拓爲用於當地取扱ひ様被仰付之

内海臺場守衛ニ就テ金五千兩ヲ松平越前守ニ賜フ

松平越前守 本芝一丁目内海御臺場附陣屋地家作共被下ひ處手狭ひ付人數差支ひ趣ひ付芝新網町丹羽左京大夫屋敷家作共陣屋地として引替被下且又只今迄神奈川表にて警衛向入精相勤め同所沼地等ふ有之ひ處不日築立速ひ家作相建住居向迄も相整ひ段畢竟爲警衛向厚く相心得ひ故の儀と相聞ひ然る處今般持場

替被仰付の陣屋地も引替被下ゆふ付ての家作取建等尚又二重の手敷も相成り隨て入費も不少可爲難儀と思召ゆ依之別段の譯を以て爲手當金五千兩被下丹羽左京大夫へ越前守家作共被下右芝新網町屋敷用ふ付家作共可被差上ゆ代地本として芝一丁目松平越前守陣屋地家作とも被下之

十五日 和宮江戸清水屋形ニ着興 今五半時係供揃にて板橋宿より清水係屋形へ係着興 勅使今朝到着し付係使として係老中差添へ高家被遣之

廿日 從四位中將兼肥前守松平齊正致仕ス

松平肥前守齊正右へ願之通隱居被仰付家督無相違嫡子信濃守へ被下之長崎係番所の儀父肥前守時の通被仰付之

別紙肥前守當職中長崎表係警衛向の儀格別心と用る出精相勤ゆ趣係聽し達し一段の事ゆ被思召ゆ依之係鞍籠被下之且又信濃守年若の事ゆ付長崎表勤向等心添ゆ様被仰出之

姓鍋島名齊正侍從齊直の男文政庚寅封を繼ぎ今年致仕して閑叟と號す曾て詠する詩云

八州風雲衝天起、難握天下兵權柄、悲歌一曲唱者誰、鎮西男子名齊正、

自古和親多誤國、比年誰克見機先、滿城風雪寒窓下、獨讀老蘇番歌篇、

廿一日 勅使御對顔京都ノ進物ヲ柳營ニ披ク

御年頭並御繼體立親王宣下係移徒の係祝儀 勅使親王使兼和宮様係下向ゆ付供奉等にて參向の面々御對顔ゆ付溜詰係譜代大名同嫡子高家雁之間詰御奏者番登城○今日の上刻係白書院出御 勅使廣橋從一位坊城中納言右 御對顔年頭の係

祝儀 禁裏より係太刀目錄黃金三枚 親王より係太刀目錄黃金一枚 准后より黃金一枚○御繼體立 親王宣下の御祝儀 禁裏より色綸子十反三種二荷 親王より御太刀目錄黃金一枚二種一荷 准后より紗綾十卷二種一荷○係移徒の係祝

儀 禁裏より御太刀目錄係硯文臺一具 親王より御太刀目錄御屏風一双 准后より色綸子五反右順々係頂戴○年頭の爲係祝儀九條關白殿使者御太刀目錄 二

條内大臣殿使者御太刀目錄 近衛大納言殿使者御太刀目錄二種 鷹司左衛門督使者御太刀目錄一種 聖護院御門跡使者御太刀目錄 智恩院御門跡使者御太刀

目錄係熏物右差上之係目見披露高家 勾當内侍より十帖一卷右 和宮様内親王宣下の係祝儀紗綾二卷右披露高家 廣橋從一位坊城中納言自分御禮御太刀目錄

紗綾二卷右披露高家 廣橋從一位坊城中納言自分の儀御太刀目錄紗綾五卷宛
差上之出座披露高家 中山大納言御太刀目錄紗綾三卷 菊亭中納言同上紗綾二
卷 橋本宰相中將同上 野々山宰相中將同上 八條三位同上 葉室頭右大辨御
太刀目錄右御對顔披露高家 今城中將御太刀目錄 千種少將同上 岩倉少將同
上 富小路中務大輔同上 橋本侍從同上 小倉侍從同上 北小路極藤同上右御
目見披露高家 次係疊縁太田侍從使者係鷹絳二掛右係移徙の儀祝儀御太刀目
録係攝家係門跡方便者 和宮様係供にて罷下り地下の者共係醫師菊亭中納言家
來廣橋從一位家老御鷹の絳三掛和宮様係下向し付扇子差上之 野山將曹坊城中
納言家老二人樂人惣代御冠師御烏帽子係末廣師何れも扇子差上之係目見披露係
奏者番○勅使係對顔相濟ひふ付係使高家を以て係樽肴被下之
廿二日 將軍家御系圖清書ニ就キ林大學頭等ニ物ヲ賜フ
林大學頭卷物五林圖書頭同上小十人頭池田修理卷物二右日光山へ係納相成ひ
係系圖清書仕り差出ひふ付被下之
廿五日 勅使款待ノ爲メ能樂ヲ柳營ニ行フ
此日 勅使堂上方へ係馳走として係能興行有之

勅シテ英人伊勢志摩兩國近海ノ測量ヲ禁ス

今度英國より測量の儀申立ひ趣 神宮より言上の趣にて初て被聞召被遊 御驚
ひ 神宮の義の兼て被仰立も被爲在ひ義故關東あ於ても如才無之義と被思召ひ
へ共自然神之郡志摩國へ立入ひ様にて 神宮へ對し係尊神の係廉も不相立被
爲恐入ひ係譯にて 皇國係瑕瑾にも可相成必を神之郡志摩國等へ異人共不立入
ひ様尙又堅固ふ其役々へも申渡相心得ひ様被遊度ひ間早々關東へ申達し於關東
承知取計方被 聞召度思召ひ事
右之通武邊へ被仰出ひ事
一伊勢神宮へ 勅誼本文前同斷別紙之通被仰達有之ひ間若し往復不相濟内異人
ども立寄ひ義も有之ひひ前條の意味を以て可及應接右の次第 勅使を以て被
仰達ひふ付從司神宮役所へ係注進申上ひ事 右本文早々關東へ相達し關東より
萬兩九船一艘被差向英人測量の義暫く係差留し相成ひ事

○十二月

九日 諸品分外ノ高價ニ依テ諸商人ニ達

近來米穀諸色とも高直の處去る申年達作ふ付際立直段引上げ下々難儀致ひ趣相

聞ひ當年ハ米穀を始め豐作の品の相場も下落致ひ間右ハ準と夫々引下け可申處
一旦直段引上ひ品の容易引下け不申何品ハ不寄高價ハ賣出し趣相聞不將の
事ハ追々諸色高直ハ相成ひ得ハ詰リハ世上一統の難儀と相成ひ事ハ間ハ國
恩をも相辨へ此上精々直段引下ひ様可致ひ尤も直段引下ひ迪も器物等劣らせハ
義ハ決して不致直段相應の賣徳を以て正路ハ渡世可致旨遣元仕入元を始め問屋仲
買未々の商人共ハ至る迄嚴重ハ可申付ハ右之通申付ても猶引下け不申ハハ
其筋々へ遂詮議不束の賣買いたし者有之ハハ無用捨吟味の上嚴重ハ咎可申
付ハ右之趣ハ國々へも相觸ハ間仕入元直段引下け不申或ハ買しめ等致ハ者有之
ハハ是又可爲曲事ハ右之通相觸ハ間私領の内國産物有之面々ハ直段引下け
方の義其領主地頭より精々遂吟味可被申ハ若し此上元直段不引下歟又ハ不正の
義も有之趣相聞ハハ領主地頭の可爲越度ハ

十一日 和宮本丸ニ入興並慶賀ニ就テ物ヲ供奉ノ公卿衆ニ賜フ
今十一日辰上刻清水彦屋形より御出興吹上上覽所前通り竹橋御門ハ堀端大手御
門より御本丸ハ車寄へ被爲入御本丸御規式ハ御譜代大名高家雁之間詰ハ奏者番
菊之間縁頗詰父子共布衣以上のハ役人直垂狩衣大紋布衣着用 儀道筋御門々當

番の面々鬘斗目半袴着用相詰御着興以後登城但大手内櫻田當番の面々ハ裝束着
用 殿中詰合の面々當番のハ番衆鬘斗目半袴着用 儀用ハ掛りハ面々ハ大紋布
衣素袍着用 御入興の節列居の面々大手ハ番所前へ大手ハ門番二丸銅ハ門前ハ
持頭中之ハ門前ハハ譜代大名同嫡子中之ハ門内ハ先手番所前へハ先手ハ玄關冠
木ハ門外へ溜詰高家雁之間詰御奏者番菊之間縁頗詰同嫡子下乗橋外左右へ大番
頭御書院番頭御小性組頭新番頭中奥ハ小性内櫻田ハ門番芙蓉間ハ役人布衣以上
以下ハ役人百人組頭御玄關前ハ門外へハ書院番頭ハ玄關脇布衣以上以下の者ハ
ハ玄關前腰掛にて赤飯被下ハハ公方様より白銀五十枚卷物十宛 和宮様より白
銀三十枚宛廣橋一位坊城中納言中山大納言菊亭中納言へハ公方様より白銀卅枚
卷物十ツ、和宮様より白銀廿枚卷物七ツ橋本宰相中將野々山宰相中將八條三
位葉室頭右大辨へハ公方様より白銀廿枚卷物七ツ宛 和宮様より白銀十五枚卷
物五ツ、今城中將千種少將岩倉少將富小路中務大輔橋本侍從北小路極へ藤右ハ
入興相濟ハハ付爲ハ祝儀被下之 地下の輩へ被下物の書付廣橋坊城へ御渡ハ有
之ハハ檜重一組鮮鯛一折ツ、勅使二人中山菊亭野々宮八條葉室橋本へ右ハ入
興相濟ハハ付被下之ハ使高家を以て被遣之ハ同日ハ書付 和宮様ハ入興相濟ハ

爲儀祝義來る十五日慰斗目半袴着用惣出仕 溜詰儀譜代大名同嫡子明後十三日
返答ノ付如例登城ノ様可被違ヒ事但シ五半時揃の事

十三日 將軍家婚姻慶賀ノ勅答ヲ上ル並銀卷物ヲ勅使及ヒ公卿衆
ニ賜フ

勅使へ返書付溜詰儀譜代大名同嫡子高家詰衆儀奏者番登城今巳の上刻儀白
書院へ出御 勅使廣橋一位坊城中納言右邊前へ被爲召 禁裏 親王 准后より
年頭並ニ繼休儀移徙の儀祝義被進儀返答被仰舍之右兩人へ白銀三百枚綿二百把
立親王 宣下儀祝義として卷物三十 和宮様儀供ふ付白銀三百枚綿二百把
被下 中山菊亭野々宮八條葉室今城千種岩倉富小路橋本小倉北小路右七人へ
白銀百枚綿五十把宛被下右歸洛の儀暇被下物拜領物被仰付之儀次儀疊縁 和宮
様儀供にて罷下儀地下の者共其外 勅使を始め家來共儀目見攝家御門跡方便者
菊亭家老廣橋家老坊城家老吉田使者樂人惣代儀烏帽子師儀未廣師右儀暇銀時服
等被下之其餘畧す

十五日 和宮入興ノ賀ニ就テ物ヲ諸役人ニ賜フ
此日惣出仕和宮様儀入興濟並諸役人拜領物 酒井若狹守儀太刀 大和國兼清
代金廿五枚 和

官様より卷物十右 和宮様御下向御用骨折ハ付被下儀旨嫡子修理大夫へ被仰
渡 久世大和守へ 御手自御太刀 三原正家
代金廿枚 御紋付御鞍籠御鞍覆被下 若年寄酒

井右京亮へ御刀三條 代金十
五枚 御紋付鞍籠同上加納遠江守へ御刀 高田長盛代
金十五枚 御側

衆平岡丹波守へ御刀 豐後國守次
代金十三枚 御鞍籠同上池田甲斐守へ時服五被下和宮様御下
向御用取扱ハ付於儀前拜領之其餘拜領物不違枚擧云

○井伊掃部頭 右御婚禮相濟ハは、京都へ御祝儀の御使被仰付 翌戊年二月十
九日儀暇被下金百枚時服十拜領高家横瀬山城守右同斷ハ付掃部頭差添被仰付右
同上儀暇被下金二十枚拜領之

十六日 諸侯叙任並賜金拜借金各差アリ
松平兵部大輔任從四位上○南部美濃守任少將○大膳大夫嫡子松平長門守任少將

○南部遠江守任侍從○小笠原信濃守 榊原式部大輔 酒井左衛門尉 戸田采女
正 溝口主膳正 松平丹波守 島津淡路守 若狹守嫡子酒井修理大夫右並叙四

品 寺社奉行青山大膳亮儀役儀免叙四品儀奏者番其儘可相勤是迄出精相勤ハ
付金三千兩被下之

松平修理大夫へ右ハ居屋敷燒失可爲難儀と被思召儀由緒柄別段の思召を以て金

二万兩拜領被仰付之

廿一日松平相模守任中將

廿三日上杉彈正大弼へ係鞍鐙右へ常々出精格別謹慎の段達上聞一段の事思召
ひ依之被下之

廿五日高家官原攝津守へ時服五 由良播磨守横瀬山城守土岐出羽守へ時服三宛
右年頭の 勅使並和官様供奉等にて公卿殿上人等多人數參向の處格別骨折相勤
ひふ付被下之

廿八日丹羽左京大夫へ上總國富津係備場係警衛係用相勤ひふ付てハ入費も不少
趣の處領分不時の災難物入も相嵩ひふ付拜借金被相願ひ當時係沙汰難被及び得
共係備場係用も相勤可爲難儀と被思召出格の譯を以て金五千兩拜借被仰付ひ

長州侯開鎖論ヲ建白ス

近年外國より種々難題申立ひ趣相伺不慮の變も出來内外とも御煩慮の係時節と
奉恐察ひ勿論廟堂の御籌畧へ外向より可奉伺様も無之係歴々係評議係遺策可有
之とハ不奉考彼是以事ケ間敷申立ひてハ越俎の係譴責奉恐入ひ得共當時勢 皇
國の係榮辱ハ相拘りひ儀も可有之哉と奉存ひふ付てハ區々の鄙夷日夜難忘不得

止事無根之世論を以て心を留め迂僻の議論を取係政体にも相拘りひ儀申立ひて
ハ猶更恐懼の至ハ係座ひ得共右鄙誠の處被聞召不惡係取計被成下ひ様奉願ひ右
申上度旨趣ハ先年以來度々申立ひ通討異の係良策ハ公武係一和 叡旨御遵奉ハ
基き可申數年相含ひ鄙見ハ係座ひ處去午以來公武の係間係議論齟齬の儀有之於
世上奉伺種々雜說紛興仕段々係手煩も指起余程係配慮にも相成哉と奉伺ひ竊ハ
事の所由を愚見仕ひ處先年外國へ和交係差許條約係取替ハ相成ひ儀ハ素より無
係據係場合有之ひての儀ハ得共癸丑甲寅以來大奮激の人氣一旦屈摧仕り倫安
の人情一日の無事を貪り終ハ一統退縮の世風ハ相成御國体更張の期無之様相成
可申哉氣節を負ひ慨歎を抱きひ者外威の威力ハ壓れ安を倫ハ戰を忘れひ俗情よ
り斯様相成ひ儀と存詰猥ハ公儀の係處置を如何敷批判仕り 叡慮の旨ハ鎖國の
御舊規を係確守被遊ひ様相唱へ破約戰爭の義を主張仕り壯年血氣者の憤言激行
を醸成し且又彼我形勢を考へ彼の巧利技術を味ひ者開國の説を主張仕猥ハ我國
の正氣を拆き商賈貪亂の風より染漬の議論紛々兩端ハ分れ一旦攻撃の形をなし
人心恟々土崩瓦解の勢とも可申哉天下の勢ハ合ハハ強く離れハ弱ハ此支離解散
の人心を以て夷虜ハ係當り被成ひてハ係心遣の儀と奉存ひ然る處ハ右鎖國開國

と申ゆへ征夷の係大休關係重く得共其根本より見ひ得へは是等枝葉の説とも
可申 公儀の議論草野の可伺知事に無之ひ得共斯枝葉の是非と以て係違却の
儀出来仕ひ筋に有之間敷哉と奉存ひ其故に能可守して是を攻能可攻して守る
者兵家の常典鎖す事能はされば開くべりらぎ不能開の鎖すべりらぎ 御國体不
相立彼が凌辱輕侮を受くるの鎖も眞の鎖あり開も眞の開も無之開鎖の實に御
國体の上ふ在べし 御國体相立ひ得ば開鎖和戦の時の宜ふ隨ひ守株膠柱の儀に
有之間敷然るふ又 御國体を相立ひ基本と申ゆへは大倫大義を明らかと天下
の議論統一人心和恬の係處置あり可有之哉右物議紛々相起ひ本意を熟考仕ひに
公武の係間純然係合躰にて係國体相立ひ外有之間敷種々雜説係手煩も差起りひ
に其末弊あり可有係座あり付其源を塞ぎ其流を係治被成ひに係鎮定強て手間被爲
取り儀に有之間敷往昔草昧の世と違ひ當御治世以來厚き係世話を以て文教大
お開け理世の時にて君臣の道を可崇事三尺の童子も口お藉ひ様相成ひお付是
迄とても聊無係跡遠係事にいひへ共天下の大經を被爲立ひ儀に万々係厚重お被
爲在度事お付此時勢お當りひて今一際 天朝を御崇奉し係取扱振世上へ相顯
れひに天下の人心感服仕右物議係鎮靜容易お係整 御國体の基本も相立可申

哉右基本被爲立ひ上の和親を被差免ひに乍恐枝葉の係處置共可申哉お付速に大
國の係大規模被相立 御國体嚴然と相立ひ様係國論を被相立ひ事と奉存ひ左ひ
ての係手を下しひ處に武備益々係張擴にて航海の術廣く係開き人々心膽を練り
智識を發明する道に向ひ諸藩夷情熟知の上へ彼を恐るゝは足らざる處を知り我
も恃むべき良策も相立可申此非常の時お當り中興の係大業も被爲立ひ事にいひ
へ共人心の折合方深く係案お被爲在ひ由過る已年係沙汰の趣も有之制度係改め
航海の術係開き等の儀に疾お係評決被爲在今更當否利害等不及申上儀あり可有之
其後追々係沙汰の趣も奉伺ひて乍憚係趣意筋奉恐察ひ然る處今以 係國內一統
耳目一新仕ひ様係沙汰無之ひて何々係深謀被爲在ひ事可有係座哉の段可奉伺
筋も無之ひへ共宇内の形勢に年序と追て相開ひお付て今日如く係國論係變
革の機會お臨みひも自然の勢ひあり可有之若舊習お泥み漸く時勢被押移無據係變
革相成ひての係手後お相成のみならず却て人心の折合おも相拘り可申哉と深く
奉恐入儀お付右 係國論速お係決定相願ひ儀お係座右の通り係合躰の係取扱
顯然と相成り天下の人心感服係國体嚴然の 係國論被相立ひに定て 叡慮も
可被爲在素より開鎖の体へ係泥み被爲在ひ儀あり有之間敷お付何卒 叡慮より

被爲起右 御國定の旨 勅諭を以て被 仰出右を 係遵奉被遊 台命を以列藩
 へ係沙汰相成ひハ義理判然人心深感服仕退縮の氣一旦進張ハ相改り倫安の陋
 習も奮發仕り神州億兆の人心一國の正氣ハ相成り前後種々の物議も氷解仕り毫
 末内顧の患無之 係國威凜然と五大洲へ相振ハ 係大業も成就可仕哉と迂避
 の私見ハ座座ハ 係廟議の上ハ於て大海の涓滴にも相成度心懸ハにも無之
 ハ得共數代無限 係寵命を奉戴 係國澤ハ溢れ居ハ付兼々報効の心得ハ罷在
 ハ不圖時勢感發仕不顧僭妄申立ハ只々食芹の味進獻仕度區々鄙誠不惡係亮察
 被成下不都合の儀も座座ハハ聞捨被成下度重疊奉願ハ委細の儀ハ演説書を
 以可申上ハ以上

松平 大膳 大夫

定價 六錢

